

一宮市・尾西市・木曾川町合併シンポジウム  
(尾西会場)

平成15年12月14日(日)

一宮市・尾西市・木曾川町合併協議会

## 一宮市・尾西市・木曽川町合併シンポジウム

○日 時 平成15年12月14日（日） 午後1時00分

○会 場 尾西文化会館 3階 講堂

○基調講演講師・コーディネータ

稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授

○パネリスト（3名）

谷 一夫 一宮市・尾西市・木曽川町合併協議会会長（一宮市長）

丹羽 厚詞 同 副会長（尾西市長）

山口 昭雄 同 副会長（木曽川町長）

○日 程

1. 開演

2. あいさつ

3. 基調講演 「地域の未来と市町村合併」

4. パネルディスカッション ～みんなで考えよう このまちの未来～

5. 質疑応答

6. 閉演

## ○司会

皆様、お待たせをいたしました。ただいまより「一宮市・尾西市・木曾川町合併シンポジウム」を開演いたします。

皆様、本日はお忙しい中、「一宮市・尾西市・木曾川町合併シンポジウム」にご来場いただきまして、誠にありがとうございます。

本日のシンポジウムは、初めに基調講演といたしまして、四日市大学総合政策学部助教授、稲沢克祐先生より、「地域の未来と市町村合併」と題しましてお話をさせていただきます。その後、休憩を挟みまして、この地域、一宮市、尾西市、木曾川町の合併につきまして「みんなで考えよう このまちの未来」のテーマのもとパネルディスカッションを行います。

なお、ここでパネルディスカッションにつきまして、出演者の変更を申し上げます。

パネリストとして予定をしておりました社団法人尾西青年会議所顧問、上田芳敬さんですが、先日ご家族にご不幸があり、喪中につきご欠席となりました。本日のパネルディスカッションは、一宮市長、尾西市長、木曾川町長の3名のパネリストで行います。予めご了承くださいますようお願いいたします。

また、パネルディスカッションの終了後には、会場の皆様からご質問、ご意見をお受けする時間もとってございますので、よろしくをお願いいたします。

そして、申し遅れましたが、私、本日の司会を務めさせていただきます江崎あずみと申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それではまず、主催者を代表いたしまして、一宮市・尾西市・木曾川町合併協議会会長、谷一夫一宮市長よりごあいさつを申し上げます。

## ○谷 一夫合併協議会会長

皆さんこんにちは。一宮市長の谷でございます。

尾西市の皆さんの前で話するのは初めてでございますので、多分ほとんどの方が初めて生で一宮市長の顔を見ると、生でその声を聞くということになるのではないかというふうに思っております。今日は年末で大変お忙しい中、ご参加をいただきまして、ありがとうございます。2市1町の合併協議会の会長という立場でごあいさつをさせていただきます。

私ども、8月8日に第1回の法定合併協議会を開催いたしまして、その後、精力的に協議を進めさせていただいております。今、日本の国がどんな状況にあるのか、そして、地方自治体がどんな状況にあるのか、そして、これから私たちはどんな方へ向かっていくのか、今日のシンポジウムでいろいろと皆様方にお話をしたいと思っております。

そんな状況の中で、私ども、2市1町の市長、町長は、やはりこの際、合併という選択肢を真剣に考えるべきだという判断に立ちまして、こういった協議会を持ち、そして、合併をすればどんなふうになるのかと、そういった協議をすることにいたしました。

詳しい、例えばサービスがどうなるのか、負担がどうなるのかとか、こういったことはまた年が明けてから皆様方に詳しくお話をする予定にしております、今日はまだそこまで協議が整っておりませんので、もう少し総論的なことになろうかと思えます。

常日ごろ、一宮、尾西、木曾川の皆さんは、まちの境を越えて大変親しくおつき合いをさせていただいているわけでございますけれども、合併ということテーマにして、初めて全部をさらけ出して、お互いの中身をチェックすることになりました。そうしましたら、大変驚いたことに、本当に細かいところが、あるいは大きなところがいろいろと違いがございます、こういったものもいろいろすり合わせていかなければいけない大変な作業を今進めているわけでございます。

しかし、先ほども申し上げましたように、私どもは何とかこの事業を成し遂げて、これからの厳しい世の中で生き残っていくためにも、合併という選択肢を真剣に考えたいと思っているわけでございますので、今日はどうかひとつ最後までお聞きをいただいて、またいろいろとご意見を賜れば幸いです、よろしくお願いをしたいと思います。

それでは最後まで、どうぞよろしく御清聴のほどお願いいたします。ありがとうございました。（拍手）

#### ○司会

続きまして、会場市町を代表いたしまして、丹羽厚詞尾西市長よりごあいさつを申し上げます。

#### ○丹羽 厚詞尾西市長

皆様こんにちは。本日は、年の瀬の本当にお忙しい時期にもかかわらず、このように大勢の皆様方おいでいただきまして、誠にありがとうございました。

尾西市といたしましては、先週やっと市会議員選挙も終わりました、これから2月の後半に予定しております住民投票に向けて、まず第一歩ということでこのシンポジウムを開催しました。まさにこれから合併協議の本質に入っていく、そういった時期を迎えたと考えております。

7月からずっと私自身は皆様方に対して、住民説明会あるいは出前講座などで、私の思いを話させていただいておりましたが、今回は一宮市の谷市長さん、そして、木曾川町の山口町長さんも来ていただいて、直接皆様方、お話をさせていただくわけでありまして、今回先ほども説明がございましたが、突然のご不幸によりまして、上田委員さんが欠席であります、急遽そのときに代理の方、どなたか頼もうかというお話もあったのですが、いや、それよりも質疑応答の時間をたっぷりとっていただいて、直接皆様方から質問を聞いた方がもっと有効ではないかということをご提案させていただきまして、こういった形で行わせていただきます。

どうか本日のシンポジウム、皆様方の2月に向けての住民投票のしっかりとした材料になりますことを祈念いたしまして、どしどし質問もさせていただきますようお願いいたします、冒頭のあいさつとさせていただきます。今日はどうぞよろしくお願いをいたします。（拍手）

## ○司会

それでは、これより基調講演に移らせていただきます。

本日、講師としてお招きをいたしました稲沢克祐先生は、昭和34年、群馬県でお生まれになり、昭和57年、東北大学を卒業後、同大学院教育学研究科博士課程へ進まれ、昭和61年に群馬県庁へ入庁されました。その間、財団法人自治体国際化協会ロンドン事務所所長補佐などを歴任され、平成13年、四日市大学総合政策学部助教授に就任され、現在に至っております。ご専門は地方財政論などで、現在、京都府参与を初め、名古屋市行政評価委員会副委員長など、幅広くご活躍でございます。

本日は「地域の未来と市町村合併」と題して基調講演を行っていただきます。先生のご専門の財政的なご見識も踏まえながら、この地域の合併について有益なお話をお聞かせいただけるものと存じます。

それでは、講師の稲沢克祐先生をお迎えさせていただきます。どうぞ皆様、盛大な拍手でお迎えくださいませ。（拍手）

## ○稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

皆さんこんにちは。ただいまご紹介に預かりました稲沢と申します。お近くの稲沢市と同じ字を書きます。よろしく願いいたします。

今日私がここで皆さんにお話しする60分間ですけれども、なぜ今この時期に市町村合併ということなのか、それをお話ししたいと思っております。

なぜ今、平成のこの時期に市町村合併なのか。それは初めに結論を申し上げますと、過去50年を振り返って、そして、今後50年を考えたときに、今その時代の結節点にあって、その時代の流れが変わるこの時期に、市町村の枠組み、その枠組みを今後の50年に合わせて変えていく必要があるのではないかと気づき始めた皆さんたちが、動き始めているという理解なのだろうと、私は思っております。

なぜこの時期に市町村合併なのかということで、平成という名前を持ち出しましたけれども、これまでの間、市町村合併、もう皆さんご存知のとおり、明治、そして昭和と二度の大きな市町村合併がございました。

明治の市町村合併では、当時約7万あった市町村が1万5,000になるという市町村合併でしたが、このときの理由というのは、約300戸から500戸の住戸数を基準として、小学校がその土地で維持できるようにという形で市町村合併ができました。考えてもみてください。7万もの市町村があって、そして、小学校をその土地で維持していこうとすることができたかどうか。これはできなかつた。それならば、それをできるようにしようという形で明治の大合併が行われております。

その後、次に昭和の大合併。これはご記憶、まだ新しい方もいらっしゃるかと思うのですが、ほぼ50年前です。ほぼ50年前に人口約8,000という数字を一つの基準に掲げて、当時1万あった市町村を約3,500にすると。3分の1にすることをしたのですが、その理由は、中学校を維持できる、その大きさにしたいということになったわけです。

つまり、少しずつ少しずつ時代の流れが変わっていった、その中で市町村の持っている

事務、やらなければならない仕事がきっと少しずつ少しずつ大きくなっていく。そういう動きの中で、やはり今の枠組みの中では財政的にも行政的にも、なかなか市町村のそのときに合ったニーズというのを抱え切れなくなっている。だから、市町村を少しそのニーズに合う形で変えていきたいと思いますというものが、明治そして昭和の大合併で、そして、50年を経た今、平成の大合併という言葉が聞かれるようになっていきます。

これはどのような理由かと申し上げますと、まず、私は3つに整理したいと思います。

1つ目が、過去50年間で経済的、社会的な条件がいろいろ変わってきています。その経済的、社会的な姿に市町村の枠組みを合わせた方がいいのではないかと。よく考えてみてください。昭和の30年。私、34年生まれですけども、そのころの人の動きというのは、自転車が主だったのではないのでしょうか。今は当然のことながら自家用車というもので、非常に広い範囲にわたって人々は移動しています。移動していれば、そこにある区域というのは、当然のことながら皆さんの意識の中でも広くとられることとなります。

もう一つ、通信の手段ということになりますと、私も子供時代を思い返せば電話、これがなかなか各家庭に普及されていなかった。私の家はなかったものですから、目の前の商店にお願いして、電話かかってくると、よく呼び出されて、その電話を使っておりました。その電話が当然普及しただけではなく、私も持っていますけども、携帯電話という、どこにいても所在が知れてしまうというような、いいような悪いような道具が皆さんのお手元にある。そして、メール、こういったもので一瞬にして世界がつながっていく。このような時代になっています。もちろん手紙には手紙のよさがありますし、電話で声を伝えるよさもあるのですが、一瞬にして人々の動き、さらに経済、お金の動きがこの中で伝わってしまう、動いてしまうという時代に来ております。

その中で、昭和30年、50年前の市町村の枠組みだけが残っているということは、サービスの枠組み、これは境界線は旧来のままで、そして、皆さんの動きは全く異なった動きをしている。果たしてそれでいいのだろうかという話になってまいります。これが第1。

第2点ですけども、少子高齢社会の進行ということがあります。

50年前、日本という国は、まだまだ昭和20年の終戦、その直後でありまして、人口も今のようないく億2,000万どころではなく、約5,000万人ほど足りない人口でした。50年間で5,000万人増えたわけです。つまり、人口100万人の大きな都市がこの日本に一つずつ一つずつ毎年生まれてきたのが、この50年でした。

そして、今の統計によりますと、2006年になるとこの日本という国は、人口の増加をやめて人口が減り始める。さらにそれから50年経つと、最も悲観的な統計で5,000万人がこれから減っていきます。日本人が5,000万人少なくなっていく。最も楽観的な統計でも3,000万人が少なくなるということです。そうすると、今まで毎年毎年100万人の政令市がこの日本に誕生してきた、その逆のことが行われる。つまり、毎年毎年この日本から100万人の政令市が消えていくという、そういう社会になってきます。

そして、なおかつ50年前に比べると、人口の構造というのが変わってきます。どういふふうになるかと言えば、少子高齢、働く人の数が少なくなっていく。もちろん高齢

社会というのは、働かない人の数が増えると一概に言い切れるものではありません。それだけ高齢社会というのは、知識と経験を備えた方々が増えるという見方を私はとるべきだと思いますので、決して悲観的に見る必要はないわけです。

生産量も20代の方が消費する量よりもより少ない消費で、質の高さを求めていけばよいという社会になるわけなのですが、やはり問題点としては、税金を払う人の数はどうしても少なくなります。年金に課税しようじゃないか。さまざまいろいろ、今高齢者の方への増税の案が出ておりますけども、それにしても、16歳から64歳の人に税金を支払っていただくような税構造をそのまま高齢者の方々に、年金生活を送る方々にするというのは、これは生活をするなというふうなものですから、そのような生活を強いるような国家というのは、恐らく今後どのような道を歩んでいくか、はっきり見えています。

であれば、今後50年にどうなるかということですけども、これははっきりしております。今、合計特殊出生率という言葉があります。これは1人の女性が一生涯に産む子供さんの数、これが2.08人という数字が人口を維持していく数ですけども、1.33人。1.33人ということは、どんどん減っていくのが明らかだという、この逃げようのない世界で、今4人の税金を払う人で1人の高齢者を支えている、65歳以上を支えているという形になります。これが50年後になるとどうなるか。1.5人で1人を支えるという世界になってまいります。50年を問わずとも、20年後には既に3人を切ります。

どういったことになるかということ、私にも高校生の子供がおりますけれども、私の今の高校生の子供が社会に出て働き始め、これからどんどんやるぞと。マイホームのことを考えようとか、いろいろ考え始めたころ払う税金と、今この40代、そろそろ後半にさしかかるこの私の税金とがほぼ変わらないのだと。20代の子供が払う税金と40代の半ばを過ぎた人間が払う税金がほぼ変わらない時代が来るのではないかと。そう言われています。

であれば、今抱えている借金というものを、できる限り増やさないでおこう。これからの子供や孫のために、できる限り負担を減らしておこうと考えるのが、やはり今を生きる私たち世代の役割ではないかと。そのためには、できる限り効率のよい市町村をつくっていかなければならないという考えになります。

これはどうするかというのはまた後ほど申し上げますけども、2番目は、少子高齢の社会がこれから必ずやってまいります。そのときに今のこの市町村の枠組みのままではよいのでしょうかということです。

3番目は、後ほどまた詳しく説明しますが、できる限り住民の皆さんに提供する公共サービスというのは、皆さんに近いところの役所が提供すべきだということから、地方分権という言葉が叫ばれて、平成12年に地方分権推進一括法という法律ができて、大きく世の中、軸足を分権へと移しています。皆さんの生活、どこがどうというふうには実感はまだ余りないかもしれませんが、でも、私はこの地方分権というのは、非常にお金の使い方では皆さん向きの社会なのだろうと思います。

例えばの例ですけども、道路をつくる時、これは国が今まで国土交通省、その前は建設省というところが一括して仕組みをつくって、そしてその補助金を各市町村あるいは都

道府県が使うという、そういう構造ができていました。この構造だと、例えばもうこの道路は2車線要らないぞというような道路でも、2車線で歩道を3メートルつけなさい。でなければ、補助金が出ませんよと。これははっきりと決められています。こちらは都市部ですから余り関係ないかもしれませんが、山間部に行くと、熊とか猿しか通らないところに歩道までついている。これをもしその地方の人にやってもらうのであれば、2車線要らないから1.5車線にして、車がすれ違えるところをしっかりとつくって、歩道も3メートル要らないから、ぎりぎり必要なところにつけてやれば、それまで10キロしかできなかったものが、最大延長20キロも延長して、私のまちにも、村にも、この道路が通ずるのではありませんかと言っても、国が一手に補助金握っていけばできなかった。

それを自治体、特に最も皆さんのところで身近にサービスをしていて、皆さんのニーズをよく知っている市町村というところに、できる限りお任せしようじゃないかというのが、これが地方分権というものです。

任せられるとき、何が必要か。よく言われるのが、資源、財源、権限と言われています。資源というのは、主にこういった建物もそうですし、一番大事なものは人間です。人です。役所で働く人。その役所に働く人がどれだけ高い専門能力を身につけられるか。そういった点です。財源、お金です。そして権限。仕事を自分の考えで判断ができる。そういったものが必要なわけです。

なるべくそれを基礎自治体である市町村に移していきましょう。これが地方分権改革なのですが、移される受け皿が仮に小さければ、どんなに財源といっても、そこで上がってくる地方税というのには限りがある。ではどうするかと言えば、国に頼りましょう、県に頼りましょう。頼れば口も出されると。そういうことなのですね。そうなってくると、できる限り受け皿としての市町村の枠組みを大きくして行って、適正な規模に大きくして行って、地方税として、つまり自分たちで苦勞して集めるかわりに、だれにも文句は言わせんぞというお金をできるだけ増やしていく。大きなところになれば、専門的な仕事をする職員も増えてくる。そして、庁舎についても、できる限り大きくなれば、大きなものも持てるようになる。

そういった形で資源、財源、権限を集中できるような、豊かにできるような市町村でなければ、なかなか地方分権という受け皿にはなり得ないのではないかと。

この3点だと私は思います。

つまりもう一度整理いたしますと、過去50年間を振り返ってこの日本が変わってきた。経済面でも、人々の動きでも変わってきました。通信面でも変わってきました。そういった動きに合った市町村の境界線にしないと、なかなかサービスというものが実際に狭い区域で行われていて、本当は皆さんが広く動いている。その中でのサービスと皆さんの動き、感覚とがミスマッチを起こしてしまった。合ってこなくなったという点。

2点目としては、少子高齢社会がやって来ることが明らかなこのときに、つまり税金を支払う人が少なくなり、そして、これまで税金をたくさん払ってきた方々が、今後は税金の中で余生をしっかりと充実させていく。そういった方々が増えていく中で、今までの様



子を続けていけば、非効率を続けていけば、税金を払う人の負担というのはどんどん大きくなる一方だと。子や孫の世代にそうした負担を残し続けることをとめることができるとしたら、今しかないのだという点です。

そして、3つ目は、地方分権。できる限りその土地に住む人が、自分たちの生活、身の丈に合ったサービスを受けるためには、できる限り皆さんに近いところの市町村という基礎自治体が、サービスについての資源、財源、権限を持っていた方がいい。そうなれば、それを受けとめられるだけのある程度の一定規模の大きさがなければ、果たして資源、財源、権限というのは受けとめられるのかどうか。そういった点です。

これがまず私が申し上げたい、非常に抽象論ですけれども、3点でございます。

少し、そうは言うけども、では今のままでどうしてそんなに不都合があるのかということとは、逆に過去50年を皆さん、振り返ってみてくださいということです。過去50年を振り返って、昭和のあのときにこの日本が約1万もの市町村を持ち、この愛知県でもその当時のことを思い出してください。市町村合併という形をとらないで、1万もの市町村を持って、それぞれが細かな単位で国にがっちり依存しつつサービスを提供していたら、どうだったか。それは50年間の社会を降り返ってみるとよくわかるのではないかなと思います。

はっきり50年前ではないですけども、この日本の今の形ができ上がったのが1955年という年です。昭和30年になりますか。1955年。俗にいわれる55年体制と言われているもので、自民党1党の単独与党、そして、野党第1党として社会党というものが存在して、その体制が長らく続いて、この日本を繁栄の道へと引っ張ってきたわけです。その中にご苦労された方々という世代が、今高齢という形でいらっしゃるわけですけども、その昭和30年当時、日本の自治体はとてつもない財政赤字というのに見舞われていました。このままでは中学校の運営すら大変だという、そういう時期があったわけです。

そして、一方で、昭和30年当時の不況を抜け出した日本は、それから平均成長率10%を維持しつつ、1955年から60年へとひた走りに走ります。さらに、60年代になってもその成長率は落ちることなく、10%強のさらに高い成長率を続けて、この20年間で、つまり1955年から1975年のドルショック、そして、続くオイルショックという形で成長に歯どめが少しかかり始めるまでの20年間、日本の物を生み出す力というのは、20年間で約8倍という数字になっています。

この数字の大きさというのは、非常に大きな意味があります。なぜ8倍になれたかと言えば、日本人、まだ非常に年齢若く、皆さんも思い返してみてください。50年代から60年代にかけて、電気冷蔵庫、電気洗濯機、白黒テレビ、これが三種の神器として皆さん方の家庭に、どの家庭にも登場していった。私も自分の父や母が新しかった電気洗濯機の前で、本当にっこりとしている、もう亡くなりましたけども、私の両親、父親は亡くなりましたけども、っこりとしている姿、これは本当によく写真で見ますから印象に残っております。

さらに60年代の後半になると3Cというものが出てきますね。カラーテレビ、クーラー、マイカー、これも本当に我が家、全くどんぴしゃりの庶民ですので、ちょうどその当時か

ら70年代にかけてこれらが家庭に登場しました。それだけ日本人というのが、いろいろなものをどこに行っても同じように買うだけの物があって、そして、同じようなものをつくれれば、どんどん生産すれば、買うだけの力があって、消費があって、どんどん日本という国が栄えてまいります。

栄えていくと、今度は出てくるのが、1960年代からどんどん噴出してきたのが、公害という問題が出てまいります。そして、過密過疎の問題が当然のことながら出てきます。

なぜならば、大きく発展をするためには、できる限り同じものを少品種で、つまり、少ない種類のものをできる限り大量生産して、それを買う人がいるというのが、発展の条件なわけですけれども、この条件を満たすためには、できる限り都市部に工場を集中させることが手っ取り早く、そここのところでどんどん同じものをつくり続ける。そうすると、都市部に集中した工場に向かって、地方圏から人がどんどん移動する。集中するところでは過密が起これ、人がいなくなるところでは過疎という問題を引き起こしつつ、集中していった場所では、今度は公害という人間の環境を破壊する行為が行われてくると。これも皆さんもご記憶に新しいことだろうと思います。私、小学校のころ、光化学スモックというのは、これは本当に毎日のようにテレビで出ておりました。

そして、この時代を経ると、日本はこのままでいいのだろうかという問い直しが来ます。このままどんどんパイを大きくしていくことだけに集中していったいいのだろうか。もっとも人間の大変な部分、このままでは日本人が失ってしまうような部分に目を当てなければいけないのではないかと。何だろうか。それはまずは環境だったわけです。私たちが愛し、生まれ育ち、そういった環境を保護する。そういった点が1970年代のテーマになってまいります。

さらに、1980年代となって、一時、日本の成長率が安定成長になると、よりその志向が強くなるとともに、さらに日本人の寿命が延びてまいります。そうすると、豊かとは何なのか。皆さんも問い返してみてください。豊かとは、物に恵まれることなのか。もうその物に恵まれる時代というのは、1億総中流社会の中でほぼ満たされたのではないかと。であれば、残る豊かさというのは、主に生きがいだったり、つまり生活の質だったり、豊かな自然環境の中で自分たちの心通い合える人々と交流を持ちながら、自分たちの長い人生、これを楽しんでいくことではないだろうか。そういったふうに量から質へと日本人の価値観が軸足を移してまいります。

そうなってくると、今2つ大事なことがあります。先ほどの公害が増えた。過密過疎が増えた。こういう点を何とか克服しようという住民の皆さんの気持ちをそのままとらえてやったのは、国ではありません。まさに地方自治体の職員の方が、国が制度をつくらないその中で、自分たちがいかにすれば住民の健康を守れるのかということで、一所懸命取り組んでまいりました。

私の今暮らしている四日市では、国がなかなか四日市ぜんそくというこの負の遺産に対して手を打たない中で、企業とかけ合い、そして県と話をし、公害の総量規制を行っていき、その血のにじむような努力の中で公害が収束へと向かっていく過程が、非常にはっ

きりとつづられております。つまり、自治体の職員こそ、皆さんの生活を守るために立ち上がって、法のない中で自治体が動くという、この法治国家の中ではなかなかやりづらかった、それを克服してきた人達なわけです。

恐らく明治のころの約1万あった市町村で、果たしてそれができたかどうか。はっきりと3,500に再編されて、その専門に当たる職員の充実、さらに財源も基盤も充実していった、その市町村だったからこそできたことではないだろうかと思います。

それと、先ほど人々の皆さんの志向が量を増やしていく、パイの大きさを増やしていくことよりも、これからはそのパイをどれだけ自分たちの生活に、あるいは生活の満足に合った切り分け方をするのだろうかという点から、量から質へと皆さん方の生き方が変わってきた時代、その時代に行政の仕事を合わせるとすれば、行政の方の仕事はできる限り細かく専門的になってまいります。

確かに、私みたいにさすがに35歳を過ぎてから海外に出たような人間は少なくなってまいります。その後を取り返すようにいっぱい出ていますけども、今では国際化というその言葉すら、この中では余り聞かれなくなった、当たり前過ぎて。そういう時代になってまいります。情報社会。これすらだんだん言葉の中で聞かれないです。当たり前のことだと。物心ついたときから、目の前にコンピュータ画面があって、そして、生活をしていく子供たちがいるこの社会の中で、情報化社会、当然のことに皆さん、受けとめています。

国際化、情報化、そして少子高齢化、こういった問題にきめ細やかに対処することのできる存在、そして対処してきた存在は、まさに基礎自治体の、つまり市町村であったという事実は、やはり先ほどの1970年代からの日本の移り変わりに、国に先駆けてまず立ち上がって対処してきたのが基礎自治体だったことを考えると、この大きな役割というのは、やはり昭和の大合併を経てつくられた市町村の枠だったからこそできたのではなかろうかと思います。

今までの話、ある程度1980年ぐらいまで来ました。これから何に向かうかという、平成バブルに向います。その平成バブルで、日本という国が一つの大きな遺産をしょってしまいます。不良債権、そして、経済の減速どころではないデフレ経済という負の遺産をしょい込んで、失われた10年、2000年になって新しい世紀を迎えても、なかなか回復しないこの日本社会というものが、目の前にあります。

50年間で、今申し上げたような、タイムマシンに乗ったような話だったでしょうけども、皆さんそれぞれ電気冷蔵庫とかカラーテレビとか、そういったところで思い返す皆さんの人生の1コマはあったらと思います。であればこそ、これからの50年間は、できる限り子供たちが、あるいは孫が振り返るときに、一つの自分の人生の名場面として思い返せるような社会、共同体にしていかなければならない。それができるのが今だと思います。

今バブルのことまで話がいきましたけれども、1985年から1990年、このときバブルのまさに真っ最中、たった5年間で日本の経済というのは27.6%成長しております。97年からこの2003年までの5年間で、その成長が1.5%。この大きな差というのは、5年間で10分の1以下になってしまう、20分の1以下になってしまう成長率というものが社会に与えて

きたものというのは、どのようなものか。そして、それが負の遺産として残っているものはどのように考えていったらよいのか。それをよく見極めなければならないと思います。

また、バブルのころ、まさに経済が真ただ中、成長していたころは、失業率2.0%、それが現在では5%前後、いつも優等生だったこの日本が、失業率5%前後という数字に直面しております。こういう現状はどのように考えればいいのだろうかという点も、一つ頭の中で整理をしていただきたいと思います。

今私がいろいろこの50年をたどりながら、最初のころすごく威勢のいい話をしてまいりました。それがだんだんと話の流れが景気が悪いような話になってきて、もう最後の方では絶望的なことを言わざるを得ないような、そんな雰囲気になってきましたけども、何もこの12月のよき日に、皆さんを絶望に陥れるために私はここへ立っているのではなくて、それは全くそういう目的ではなくて、今そういう状況であっても、日本という国が持っている力というのは物すごく大きなものがある。それが表に出ないだけだということを申し上げるためにわざわざここまで話してきたわけです。

これをはっきり、戦争を経験されている方は、戦後の荒廃時期を思い返してみてください。戦後のあの荒廃の時期に、日本という国はもうこれだけ国というものが破壊し尽くされてしまってだめなのではないか。だれしもが思っておりました。一方で、いや、そんな国ではないと。我々が立ち直らせてみせるのだということで、1920年生まれ以降の方々が、とにかく額に汗して頑張ってくださいったわけです。実際今の世界があるわけですけども、いわゆるそのときの日本というのは、成長の循環というものに、うまくその世代の方々の努力のおかげで入れたと。

どういうことかと申し上げれば、よく欧米に追いつけ追い越せなんていう言葉がありました。それで、日本は頑張ったのだと。あのときに破壊し尽くされてしまったこの荒廃した国土を見て、アメリカに追いつけ、ヨーロッパに追いつけ、そういった気持ちで頑張ってきたから乗り切れたのだと簡単に言うてしまう方、いらっしゃいますけども、実際のところはそうではないです。

追いつけ追い越せと言ったのは、アメリカに追いつこうとしたのではなくて、フランスやドイツ、イギリスに追いつこうとしたのではなくて、もともと非常に高い日本人の知性と、そして読み書き算数をだれでもできるという学力と、そして、一つ組織をつくれれば、その組織を最も最適な状態にもっていける協調性と、そういうソフトな部分というのが日本人にあって、それは戦争がどんなに日本という国土を破壊しても、絶対に失われることがなかった。そのソフトはそのまま、戦後復員されて来た方々が持っていた。そこに、荒廃した国土を立ち直らせるハードの面をつくり上げることで追いついたというのが、本当の話だろうと思います。

つまり、欧米に追いつくのではなくて、高いソフトをいかに生かせるか。その面にハードの道路やあるいは建物、さまざまなまちが破壊されていた、そのハードを追いつかせたと。であれば、この平成時期、何を追いつかせればいいのでしょうか。

このたくさんの負の遺産を抱えてしまった。不良債権を抱えてしまった。2000何年日本

破産なんていう本がベストセラーになる。そのようなさまざまな脅かしの中で、何に追いつかせればいいのか。今日本が持っている資産、果たして日本という国は、ソフトの面で大めになったのでしょうか。そんなことはないです。不良債権と我々日本人の能力というのは、全く別物ですよ。それから、ほぼ3,000兆円にも上るこの国富、それが破壊されてしまったのかどうか。そんなことは当然ありません。

持ち得るべき資産というのは、我々の頭の中に、そしてこの国の中にあるのだと。で、追いつかせるものは何か。まさにその大切なソフト、戦後に大切なソフトをいかに十二分に活かせるかという点で、ハード、道路とかあるいは建物、さまざまな工場設備を追いつかせていったように、この日本という国をできる限りそのソフトを活かせる、無駄をさせない、今後の社会の50年間に合った姿にしていくことが、今のこの時期の役割なのだろうと思います。

恐らくは、さまざまその方法はあるかと思いますが、そのさまざまある方法の中で、皆さんの生活に最も直結している解決策、打開策というものが、私は一つ市町村合併だろうと思います。

先ほどなぜ明治、そして昭和、そして平成と、この三度ある市町村合併と言われているこの三度目に今私たちがいるのかということをお願いしました。その理由として3つ申し上げました。

社会・経済圏、こういったものが拡大しています。それに合わせましょう。

そして、少子高齢社会、このままでは、税金を払う人がいずれ1.5人で1人の高齢者を支えなければならない、そんな重たい社会になってくる。重たい重たいということは、これは言い続けることではなくて、重たければ少しでも軽くする。そして、高齢社会のメリット。高齢社会であることというのは、これはメリットでもあるわけです。それだけ人生の叡智、知恵を持って、経験を持った方が増えていくという点ではメリットなわけです。そして、基礎代謝量も減ってまいります。そういったメリットを十二分に活かせる方向にもっていくには、できる限り効率よく社会というのが動けばいいのではないかと。

そして、3点目は、できる限り皆さんの身近で、皆さんの生活に合った、生活に合ったというのは、もう量を満たすことよりも質をできるだけ高くして欲しいという皆さんの願いをかなえられるのは、市町村という最も身近な自治体なのだ。

であれば、その自治体に資源、財源、権限という3つの「ゲン」の力をつけてあげること、そういう言葉を地方分権と言います。この地方分権が進んでいくためには、まさに、またもとへ戻りますが、資源、財源、権限がそのまま受けとめられるような市町村の枠組みにしてあげないと、小さいままでは財源は足りません。そして、権限も変わってまいります。

具体的に申し上げますと、資源の面でこんな話があります。先ほど資源とは、さまざまこういう建物も資源だけれども、私は役所で働く職員の方々、これ人材こそが資源だと申し上げました。どこの組織でもそうであろうと思います。その資源、どういうことを申し上げているかということ、大きな役所にいけばいくほど、専門的に仕事をする人の数が増えて

まいます。例えば女性の社会参加、あるいは男女共同参画、男女における、つまり性差にとらわれずに社会を支えていこうというその仕組みをつくる、そのために働く部署がどうなっているかとなりますと、大きな役所にいけばいくほど、その部署は係から課へという形で、人の数も増えてまいます。なぜこういうことができるのか。

あるいはもう少し具体的に申し上げれば、福祉で直接皆さん方にサービスをしていく社会福祉士ですとか、あるいは保健師、看護師、そういった特殊な技術を持った方々の数も、大きな役所にいけばいくほどはつきりと厚く配置されるようになります。なぜこうしたことができるのか。

これはそれだけ規模の利益というのがあるからです。こんな話をすると、余計迷路に入ってしまうので、じゃなぜ市町村合併を経るとこういうことができるのかという話に変えてまいます。

つまり、今市町村合併をすることによって、皆さんへ直接提供するサービスが厚くなります。これを薄くなるという話もありますけども、私ははつきり厚くなると思います。

なぜならば、まず資源の面がより充実されるからだ。なぜ2つの市と1つのまちが一緒になることで、資源、人が厚くなるのか。こういうからくりは、はつきりと民間企業に勤められている方ならばわかると思います。

つまり、それぞれの組織にも管理部門、総務とか人事とか経理とか、そういう管理部門があります。ここにある一定の数はどうしても割かなければいけない。でも、3つにばらばらにあった管理部門が一つになると、そのまま管理の人は3倍必要なのか。3つそのままの数が必要なのかという、管理の人というのは、あくまで役所の中の仕事をしているわけですから、その場所でできる仕事をしているわけですから、その数は3つが一つになったら、その3つの数をそのまま足した数は必要ないということは明らかです。1足す1足す1は3でなくてもいい。

つまり、それぞれみんなが財布を持っています。財布を持っていて、その中にそれぞれのお金が入っている。それを一つにしましょうと。一つの財布は今までの3倍の大きさ——中には財布は大きければいいという気持ちの方、いらっしゃるかもしれませんが、基本的には一つの財布にすれば3倍の財布は必要なくなってくるということは、その部分、例えば人を10人、20人、こういった形で何年間かかければ減っていくものであると。その減っていった部分を、そのまま仕事を直接住民の人に提供するサービスの方に回していくという考え方。これが当然合併することの大きなメリットになってまいます。

例えば、これは茨城県内のある市なのですけれども、合併をして、総務とか、今の関係ですけれども、総務の経費というのは58億円、合併前の市町を合わせるとありました。これが合併後の決算を見ると47億、約18.7%削減になっています。それだけ、一緒になれば管理の経費は少なくて済みますよと。同じく議会の経費にしても、合併してある年数すれば、そうなるでしょうと。いうことは、その少なくなった分がどうなっているかという、この市では子供さんたちへの教育費、それからいわゆる民生費、福祉関係のお金、このお金は逆に伸びております。そちらの方に当然のことながら経費が振り向けられていく

のだと。いかに合併が皆さん方の生活にしわ寄せを向けるのではなくて、できる限りまず資源の面で厚くなるのだというそのメリットをつむぎ出せる、その手段であるということにはわかっていただけるかと思います。

さらに、今言った数字は、今度は財源の方にもまいります。財源というのはお金ですけども、総務費が18.7%削減されますよと。その削減された約11億円をそのまま民生とか教育を増やす方にもっていかなくてもいいわけです。その分は全部振り向けなければ、ある程度の金額は全体の経費の削減という形で表れてきます。これをいわゆる効率化と言うわけですけども、つまり、住民生活にしわ寄せ、負担はできる限り寄せることなく、役所の中の経費をこのご時世に合わせて削減していく。この手を打つことが、今後の子や孫に残す日本をつくっていくにはとても大切なことなのです。

先ほど申し上げました。今日本、これから50年の間に100万人都市が一つずつ消えていく。そして、平均寿命が延び、子供たちの数が減っていくとともに、1人の65歳以上の方を1.5人で支えるような社会になってくる。そのときに、借金というもの、これは必ず返さなければいけない。どこから返すか。税金で返すわけです。税金を返す人が少なくなってくるということがわかっていて、さらに借金をどんどん重ねていくこの社会をどこまで続けていくことができるか。できる限りここははっきりととらえていただきたい。

資源、財源と来ました。権限がないのか。権限となりますと、これから2市1町が合併してできる市は、37万3,000人という大きさを持ち、面積にして113.9平方キロメートルという大きさを持つ市になります。これは皆さんいろいろ市の名前として、政令市とか特例市という名前を聞いたことがあると思うのですが、その政令市と特例市の間位置する中核市という名前になります。まさにその言葉の意味は、この愛知県の中核を担ってもらうための市という、その中核市という市に昇格することになります。

昇格すると何が変わるか。その市がみずからの権限でもってやる仕事がぐっと皆さんの身近な部分で広がっていくと。特に中核市の場合には何が広がってまいるかという、保健所というものを独立して、基本的に保健所は愛知県がそれぞれ持っております。けれども、中核市以上になりますと、保健所を独立して市として持つことができる。つまり、市の保健所にすべて話をするができる。そのトップは市長さんですから、皆さんの保健所関係の声というのは、県知事ではなくて市長に直接届くことになります。

さらに、老人保健福祉、障害者医療福祉、そういった仕事については、中核市の方に権限が移譲されてまいり、また、これは既実現されているかもしれませんが、教育委員会に全科目の指導主事が配置されるという、皆さんの大切なお子さんやお孫さんたちのこれからの担っていく教育の充実というものも、中核市であればこそできる分野というのは増えてまいります。

さらに、環境面では、年間300万トンを超える一般廃棄物の処理権限が参るということで、できる限り福祉、環境、そういった皆さん方の生活に近い部分の権限が、中核市であればこそ、市長というトップを仰ぎながら仕事をするができる。皆さんは、市長の方を向けば、そのサービスについて直接顔の見えるところで話をするができる。そのよ

うな市になるわけです。

合併ということでさまざまな意見が飛び交っております。今のこの合併は、国がお金をなくしているから、だから、できる限り地方交付税の配分先を減らしていく国のリストラに合わせているのだという見方もされているようです。

しかし、そういう面が確かに国にあってどこが悪いかということも言えるのではないのでしょうか。国と自治体がこの日本を支えていく両輪であるとすれば、その片方の車が今一つ財政難というものに来ている。そしてなお、残念ながら自治体も財政難というものが目の前にある。そして、その中でお互いにやるべきことはやろうというところで、これから50年、子や孫に残す将来のためにやるべきことを今やっておこうではないかということで、舵を切ること、これは必要なのではないのでしょうか。

そこで大切なのは、今を暮らす皆さん方に血を流させてはいけないということなのではないのでしょうか。つまり、どのような方針をとるのであれ、大切なところは、今を暮らす皆さん方にできる限り血を流させない。しかし、大切なことは、50年後を見越したときの子や孫に残すもの、負の遺産というものはできる限り、皆さん方、我々の世代、私も含めて、今の世代で少なくしておく。この非常に難しい橋を渡らなければならないのだということだろうと思います。

その難しい橋を渡るために、今国がこの財政難の中にあっても、なおかつ市町村合併のためのさまざまな優遇措置というのを設けてきています。それは、残念ながら平成17年3月までという期限付きのものです。この期限に乗り切れなかったところは、あとは合併をしてもそのような優遇措置はありませんということなのですね。ですから、今の判断というのは、今後50年を見越して、私は子や孫のためにできる限りよいまちを築きたい、よい地域を築きたい、だからこの合併の議論をするべきなのだというコンセンサスがあるのであれば、この時期に間に合うように結論を出していただいた方が、私はよろしいかと思えます。

先ほど私、少し申し上げた子や孫に禍根を残さないでほしい、借金は増やさないでほしいということと、この面は少し抵触するように感じるかもしれませんが、やはり同じお金を使うのであれば、国が設けてくれる優遇措置を少しでも利用した方がいい。

ということを具体的に申し上げますと、例えば借金をする。このまちのために借金をして、今後50年、100年残る施設、あるいはインフラを築いていく。そのための借金ですけれども、この借金を国が交付税という、皆さん方の税金が回ってくるわけですけれども、直接地方税でなく、国の方である程度面倒見てくれますよというふうに乗りかえた方が、この地域へ残る純額の借金としては少なくなる。だからといって、これを野放図にってしまうということは、やはり借金は借金なのですから、つまるところ、非常に判断は慎重にいただきたいのですけれども、やはりそういう優遇措置があるのであれば、同じことをするとき、そちらの方に乗っていただける。その選択の時期を誤らないでほしいということだろうと思います。

市町村合併については、さまざまな意見が出ます。例えば大きなまちになると住民の声



が届かなくなるのではないか。こういう懸念。これは確かに言葉ではそうすんなり聞こえるかもしれませんが、翻って大きな都市では、住民の声というのは届いていないのかどうか。決してそうではないです。住民の声が届くかどうかは、役所の側とそして住民の側と、この両者の我がまちをよくしたいという努力しかないとは私は考えます。

私、イギリスに2年ほど住んでおりましたけれども、その間いろいろな国々に調査に参りました。そこで、デンマークという小さな国ですけども、人口500万人の小さな国ですが、そのまちで非常に感じたことがあります。中心市街地というものがやはりどのまちにもあって、当然のことながら、向こうではハイストリートと言うのですけども、その町々に面している商店というのが、非常に元気に営業しています。個人商店がですね。これはどうしたことなのだろうかと。

確かに郊外に大規模ショッピングセンターがあります。車で一走り、何でもそろそろ、楽しい大規模ショッピングセンターがある。でも、中心市街地にある個人商店がしっかりと運営されている。なぜなのだろうなということでも聞きますと、私の世代、あるいはその下の世代の人たちの答えは、確かに郊外のショッピングセンターの方が安いときもある。物もそろそろから便利だと思えるときもある。でも、今この歩いて物が買えるまちの商店に行かないで、いずれ私が高齢者となって車を運転しなくなったときに、このまちの商店がなくなっていることを考えると、どのように暮らしていいかわかりません。だから、このまちは、つまりまちというのは、商店街というのは、今後私の人生を考えたときに財産なのだと思う。財産であれば、そこに定期的に通って物を買うのは、これは財産を守るということなのだというようなことを言っていました。

つまり、中心市街地とか、いろいろな大変な時期にきていると思います。そのまちは大変だと言って、個人商店の方々のご努力、並大抵のものではないと思う。しかし、一方で、そのまちというものを本当に財産というふうにするべきであって、なぜならば、いずれ来る高齢社会の中ではなかなかまち以外に行くところがないということがわかっているのであれば、そのまちを守る努力というのは住民の皆さんとそして自治体とが丸となってやるべきことなのだろうと思います。こと自治体だけに任せる、個人商店の方だけに任せるという話ではなかろうと思うのです。

パートナーシップという言葉がありますけれども、パートナーシップという言葉は、相ともに協力するという言葉の意味の前に、お互いがお互いのやるべきことをやるという、その本来の意味があるはず。お互いがお互いにやるべきことをやって、守るべきものは努力して守ったが故に、将来が約束されるのだろうと私は思います。であれば、住民の声が合併すると届かなくなるのではなくて、届ける努力をする側はだれなのか。そして、その声を聞く努力をする側はだれなのか。おのずと決まってくるのだろうと思います。

また、役所が遠くなり不便になる。こういったことも、いずれ住民説明会、あるいは現在進行形で住民説明会で説明されていることだろうと思いますけれども、役所で受けるサービス、役所に行くサービスというのは、この尾西市役所が、この建物が消えてなくなるわけでは決してないわけであって、しっかりとその尾西市役所庁舎を使ってそのまま住民

直結のサービスは行われていくわけです。それについて、遠くなる、どうだろうかということ、一概に言ってしまえるのだろうかとか。

地域の個性や連帯感がなくなってしまうのではないかと。こういった話も聞きます。先ほどの話と関連しますけども、地域の個性、だれがつくるのか。役所がつくることなのか、皆さんがつくることなのか。よく考えていただければ、おのずと答えは出てくるかと思えます。

兵庫県に先行して合併をされた篠山市という市があります。ここの首長さんたちが口をそろえて言ったのは、まちが合併してできて市になったのではないと。19あるコミュニティが合併して市ができたのだと私たちは考えているということをおっしゃっています。つまり、合併したからといって、今あるコミュニティが消えてしまうと考える方が不自然だろうと私は思います。つまり、もう少し申し上げれば、今あるコミュニティのその大切さに気づいているのであれば、合併という行為、その行為を経てもなお、当然ながら残り続けるべきであろうと。その残り続けさせるための主体はどなたなのかという点だろうと思うのです。

いろいろ申し上げてまいりましたけれども、合併を通じて幾つかの不安が皆さん方にあるとすれば、その不安は一つ一つ皆さん方と役所との話し合いと努力と、これから将来50年間、子や孫の生活を考えたときの皆さん方の熱意と役所の熱意と、そういったもので一つ一つが解決されていく話であろうと私は思います。

一方で、今この時期に合併という形に軸足を移さないのであれば、合併というものが持つメリットというのは、もう皆さんの手からは逃れていくのも事実だろうと思うのです。

なぜならば、法律というもの、これは非常に厳しいものであって、期限を切って法律がつくられている以上、そして、国が今現在、合併によるさまざまな財政的なメリット、先ほども合併特例債という、非常に使うのには気をつけてほしい借金のことは申し上げました。有利な借金あると申し上げましたけども、そのほかにさまざま有利な財政的なメリットがあります。

さらに、合併することで効率化が図られ、あるまちでは総務費がこれだけ減りましたと。減った分は全体の経費の削減にもつながる一方で、教育や民生の経費を、かつて合併される前よりも増やしましたということも申し上げました。そして、職員の人は大きくなったところで管理部門の人が減った分を、専門職という形で振りかえていく。できる限り専門的な知識を持った人が皆さんへのサービスに当たることができるようになりましたと、言いました。

こういった一つ一つは、今の時期だからこそ、今の時期に軸足を移すからこそできるだろうと思います。そのあたりの現実問題をよく整理していただきながら、今これから未来を考えて、私たちの子や孫に何を私たちの判断すべきかをよくご検討いただきたいと思います。

ほぼお預かりした60分がたちましたので、私の話はこれで終わらせていただきますが、また、これから休み時間を挟んで後、パネルディスカッションで皆さん方とはお会いする

ことになると思います。60分間にわたりましてご清聴大変ありがとうございました。（拍手）

#### ○司会

ありがとうございました。

稲沢先生には、後ほど行いますパネルディスカッションでも、コーディネータとして参加していただく予定でございます。稲沢先生、貴重なお話、どうもありがとうございました。どうぞいま一度、大きな拍手をお送りくださいませ。（拍手）

ここで10分ほど休憩をいただきまして、2時20分よりパネルディスカッションを行います。どうぞよろしく願いいたします。

午後2時10分 休憩

午後2時20分 再開

#### ○司会

皆様、お待たせをいたしました。ただいまよりパネルディスカッションを始めさせていただきます。

パネルディスカッションを始めさせていただく前に、こちらから簡単ではございますが、出演者のご紹介をさせていただきます。また詳しいご紹介は、発言の中でお話があるかと思しますので、よろしく願いいたします。

まず、会場の皆様から向かって一番左にいらっしゃいますのは、先ほど基調講演でお話をいただきました、四日市大学助教授、稲沢克祐先生です。引き続きコーディネータをお願いします。

続きまして、その右手にいらっしゃいますのは、合併協議会会長、谷一夫一宮市長です。

続きまして、丹羽厚詞尾西市長です。

続きまして、山口昭雄木曾川町長です。

それでは、稲沢先生、よろしく願いいたします。

#### ○稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

皆さんどうも改めまして四日市大学の稲沢でございます。先ほど基調講演に引き続きまして、これからの1時間少しの間、皆さんとこのパネリストの方々を結びまして、シンポジウムのコーディネータをさせていただきます。私のコーディネータとしての役目は、これだけ首長さんの顔がお三方そろっております。こういった首長さん方の生のお声をできる限り皆さん方にお届けできるように、結論を申し上げれば、なるべく私は余分なことはしゃべらないというのがコーディネータの一番大切な任務だろうと心得ておりますので、皆さん方のパネルディスカッションの後の質問時間をできる限り充実してとることが出来ますように、進行させていただこうと思っております。

今日は3人の首長さんたち、日夜この合併に向けて、合併協議会というその場で、またはあるいは、ご自分の市町の住民の方々との話し合いの中で、さまざまなご意見を述べられたりされていることだろうと思えます。

ただ、このような形で尾西市の皆さん、恐らくここはほとんど尾西市の皆さんかと思い

ますけれども、丹羽市長さんを除く2人の首長さんが一つの市に向けたお考えをお述べになる機会というのはなかなかないだろうと思いますので、そういった形では、3人の首長さん方が新しい市に向けてのお考え、あるいは今いろいろ進められていることを、ご自分のお言葉で語られる、そのような機会だというのがこのパネルディスカッションでございますので、一番最初にまず、それぞれの皆さん方の自己紹介も含めまして、今この新しい市に向けての市町村合併の考え方あるいは思い、そういったものの思いのたけを語っていただければと存じます。

この3回目シンポジウムは、実は一度目を木曽川町、そして二度目を一宮市、そして今回が尾西市ということでフィナーレでございますけれども、3回とも発言の順序同じで、一宮市長さんからしていただいておりますので、今回も一宮市長さんから順にお願いをいたします。

それでは、よろしく願いいたします。

#### ○谷 一夫合併協議会会長

それでは、改めまして一宮市長の谷でございます。

私は平成11年1月に、前市長の神田さんが愛知県知事になられましたので、その後を受けて急遽、本当に予定外に市長になってしまったと、そういう感じの人間でございます。ほぼ5年経ったところでございまして、やっと行政にも少し慣れてきたのかなと、そんな感じがしております。

先ほど稲沢先生から細かい点で基本的なお話がありました。私どもの基礎的な考え方と似通ったことをお話しいただいたわけでございますが、私も全く同じ見方をしております。皆様方が頑張ってください、この何十年間か右肩上がりの成長で来た日本が、今成熟期に入ったということですね。これは非常に大きな転換期だろうと思っております。今はすっかり死語になってしまいましたけれども、ちょっと前までは会社人間という言葉がありまして、ほとんどの日本人が会社のために自分の生活を犠牲にしても、一所懸命朝から晩まで働こうと、日曜日でも犠牲にして働こうと、こういうことで頑張っていました。

しかし、今会社人間なんていう言葉はほとんど聞かなくなりましたね。みんなが自分の生活を大事にし始めた。会社よりも自分の生活が大事だ。だから、一つの会社に入って、定年までずっと勤めるということは、今はもうだんだんなくなっていくわけでありまして、2つ3つ4つと変わるのが当たり前という社会にこれからなっていくと思います。

そういうふうに価値観が変わり、生活スタイルが変わってきたわけでありまして、当然行政もそういったことに合わせて変わっていかざるを得ない。それが成長から成熟期に入るとのことだと思います。

ところが、翻って考えてみますと、今私どもが行政として市民、町民の皆さん方に提供しているサービスというのは、まさに右肩上がりの成長期で、人間で言えば40代、50代の働き盛りで、給料がどんどん上がってお金がたくさん入る。そういうサービスをしてきたわけですね。ところが、今これからは年金生活に入っていくわけですよ、言ってみれば。そういうときに働き盛りでどんどん稼いだような暮らしぶりが維持できるかといったら、

これはやはり無理なわけでありまして、自分のもらう年金の額に合わせた暮らしぶりを考えていかなければいけない。そういう時代にこれからは入っていくのではないかと思っております。

つまり、これまではそれほど苦労しなくても、何とかいい暮らしぶりが維持できたわけでありまして、これからはやっぱり少し我慢をして、みんなで知恵を出し合って、工夫をしながら節約をし、いろいろ考えてやっていかないと、これまでの暮らしぶりすべてはなかなか維持するのが難しい。やっぱり少しレベルも落としながら、何とかもう少し快適な暮らしができるような知恵を絞る時代になっていくのではないかと思っています。

つまり、それが持続可能な地域の発展を目指すとして、そういう言葉に置きかわると思いませんけれども、そのための一つの選択肢として、合併ということを真剣に考えてみたいと私どもは思っております。

先ほど中核市の話が出ました。実は、この地域の合併パターンは、平成12年に県が合併推進の要綱をつくりまして、いろいろ地域に提示をしたわけでありまして、この地域はこの2市1町プラス稲沢、祖父江、平和の3市3町の一つのパターンと、もう一つはこの2市1町のパターンでした。この稲沢、祖父江、平和を含んだ3市3町でいきますと、人口がほぼ50万人になります。これは一応基準としては政令指定都市が望める規模になるわけですね。現実には今ほとんどの政令指定都市は100万人以上でありますから、すぐになるかどうかは別として、とりあえず法律の基準で言えば、政令指定都市の規模になるわけでありまして。

本来私どものこの地域の合併は、こういった規模を拡大することによってより大きな権限を地方に与えてもらうという、獲得しようとして、そういう形の合併に当然なるわけでありまして、30万よりは50万というのが本来の考えかもしれません。そしてまた、稲沢、祖父江、平和の方とこちらの私どもの方と比べますと、若干産業構造が違いますし、歴史や文化も若干違うところがあるのです。こういう違った体質のところと一緒にするというのが、よりその体質が強くなっていくということも考えますと、3市3町ということが、多分合併の本来の目的からいけば、目標としてはよかったのだらうと思うわけでありまして、一方には、平成17年3月までに合併をするという特典が与えられるという特例法の期限がございまして、この期限内に合併を仕上げるという意味からいきますと、とてもこの3市3町をまとめることは至難の業ではないかと、私は考えました。

そしてまた、合併というのは、一番大きい一宮市が音頭を取ってさあさあこうやってできるものではないです。やっぱり地域の皆様方が是非合併をとというふうにして、いろいろとご理解をいただいて、お声が出て初めて機運が盛り上がってくるものでありまして、なかなか3市3町での盛り上がりは、正直言って余り感じられなかったわけでありまして。

しかし、この2市1町の方は、商工会の人や青年会議所を初め、さまざまな団体から是非ひとつ一宮市が中心になって、もう期限も迫ってきたことだから進めてほしいと、こんな声が強くて出てまいりまして、尾西の市長さん、木曾川町長さんとお話をして、2市1町でまずはスタートをしよう。3市3町という大きなことはまた今後の課題にして、次の

機会にこれはまた考えようと、こういうことで現実的な路線の選択をしたわけでありまして。

この2市1町合併いたしますと、人口でいきますと37、8万という大きなまちになるわけでありまして、愛知県下でも名古屋市、そしてまた今、豊田市が周辺と合併することが決まったようございまして、豊田が40万になるのですね。そうしますと、名古屋、豊田に次いで3番目に大きなまちになるわけでありまして。そしてまた、人口が30万人以上で、面積が114平方キロメートルになりますので、これは中核市という基準を満たすことになるわけですね。

中核市になりますと、先ほど先生のお話にもありましたけども、保健所を自前で持つ。保健所が非常にたくさんの仕事をやっております。事務の数で言うと2,000以上と言われておりますが、行政の仕事は法律に基づいて仕事をするわけですので、どの法律の権限が来るかということが大事なのです。

因みにちょっとだけご紹介しますと、伝染病予防法、食品衛生法、興行場法、旅館業法、公衆浴場法、結核予防法、母子保健法、検疫法、温泉法、理容師法、美容師法、クリーニング業法、狂犬病予防法、と畜場法、食鳥処理の事業の規制及び食鳥検査に関する法律、地域保健法、医療法、児童福祉法、建築物における衛生的環境の確保に関する法律、廃棄物の処理及び清掃に関する法律、浄化槽法に基づく浄化槽法、こういった20幾つの法律に基づく仕事の中核市は自分の判断でやってもいいよと、こういうことになるわけでありまして、そのほかにも先ほどちょっとお話がありました身体障害者の方、あるいは母子家庭の皆さん、あるいは都市計画に関するさまざまな事務、それから、公園関係の環境に関する事務、こういったことが市の判断で行えるようになります。

ということは、市民の皆さんにとっては、今県と市と二重手間にいろいろなことを許可をとったり、届け出したりしなくてはいけないわけでありまして、そういったことが市の判断でできるようになるわけでありまして、手間と時間がかかり節約できることになるだろうと思います。

また、どういう仕事をこのまちの中でやるかということについても、私どもが判断できる部分がぐっと広がるわけでありまして、例えば道路整備にしても河川整備にしても、どこが一番大事なのかということは私たちが一番よく知っているわけですね。国のお役人にそのことがわかるわけではないのでありますから、しかし、今は国のお役人がそういうところに補助をつけて、それに基づいて指導、支援をしている、そういう部分があるわけですね。けれども、それを私どもが判断をして優先順位をつけてやっていくことができるようになる。これが最もわかりやすい地方分権の説明だろうと思います。

ただ、自己判断ができるようになるということは、裏返せば自己責任を伴うわけですね。これまではこれは県がやることだからといって、言ってみれば我々は逃げることもできたわけですね。けれども、こういうことになりますと、もうそういう手は効きません。すべて自分の責任において判断をし、自分でやるわけでありまして、場合によっては自己負担も伴ってくると、こういうことになるわけでありまして、大変厳しいことになるわけですね。けれども、合併してすぐということではありませんが、数年の準備期間を経て、中核市の指

定を目指して頑張っていきたいと思っております。

そのほかにも合併のメリットとしては、例えば財源をそれではどうするかという話になりますと、究極の行政改革というような表現もあるように、合併することによってさまざまな節減が可能になるわけでありますので、行政の無駄をできるだけ省いて、効率のいい行政体制をつくるためにも、やはり合併という選択肢は一遍十分に検討してみる価値があるだろうと思っております。

ただ、合併すれば全部いいところへ合わせて、そして、皆さんが出されるお金が一番安いところへ合わせると、こういうふうに思われるかもしれませんが、それはちょっとやはり無理でありまして、ほどほどのところに合わせていくということにどうしてもなります。ですから、場合によって、ここは少し尾西市の方、お得なことになるのだけれども、こちらは少し今より我慢をしてもらわなければいけませんよと、こういう部分が恐らく出てくるだろうと思います。それについては、また年が明けてから詳しくお話できるだろう。今そのすり合わせを一所懸命やっておりますので、全体像が見えたらまたお話をしたいと思っておりますが、もう少しお金があって余裕があるときですと、サービスが一番いいところへ、負担が一番少ないところへ合わせることができたかもしれませんが、今はそれができないから合併を考えようと、こういうことをございますので、それについてはご理解を賜りたいと思っております。

とりあえず以上でございます。

#### ○稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。

谷市長さんが今おっしゃったことの中で、持続可能な地域の発展と。それを目指すために、今、日夜いろいろ合併に向けてその一つの手法として取り組んでおられるという中で、地域のことは私たちが一番よく知っているというこの名言、これほど心強い言葉というのではないのではないのでしょうか。また、そのときに地域のことを一番よく知っている市役所が自己判断ができる、そのような社会に今後、地方分権という中でなっていくときに、自己判断はともに今度は自己責任と、そして、場合によっては負担というものも伴うだというこのご認識、こちらが恐らくこれからの地域の未来を支えていくときのお覚悟であろうなど、私は聞いておりました。

どうもありがとうございました。

それでは、尾西市長の丹羽様、続いてお願いいたします。

#### ○丹羽 厚詞合併協議会副会長

どうも本日は長時間にわたりましてご参加いただいております、本当にありがとうございます。

私の説明会等でのお話は聞いている方が大勢いらっしゃるかと思いますけれど、もう一度ここで今の尾西市の状況についてまず整理をしてみたいと思います。

それは、一つは、今までの経過でありますけれども、この合併の話が本格的に始動し始めたのがちょうど1年ぐらい前、谷市長さんの一宮市長選の前の新聞発表で、2市1町で

合併を協議していききたいというお話からではないかと思います。

それから、任意協議会が設立されて、その後7月に法定合併協議会ができたということでもありますけれども、そういった流れの中で、当然先ほどお話があったように、この尾西市においては、まず2市1町か3市3町か、どちらがいいかという、そういったレベルのところどとまってしまっていた部分があるのですね。非常にまだ3市3町でどうかという、そういった考えを持たれている方も尾西市の中では多いただろうという思いで、先ほど谷さんの方からいろいろ3市3町ではというお話をしていただいたかと思うわけでもありますけれども、私も合併をするのであれば、期限内にやらざるを得ない。やらなければ、余り意味のないことになってしまう。

そういうことを考えると、これから3市3町で、当時の場合ですけれども、やるとなると、一つ一つ最初からスタートする位置が全く違っていて、1年間ですべての協議を決めていくことがまず不可能であろうということがありました。

そしてもう一つは、尾西市において、合併をするという話が余りに急に湧き起こってきました。それももしするのであれば、17年3月の期限内までという話は、本当に急激に起こってきました。市民の皆さんにとってみたら、降って湧いたような状態ではなかったかと思いますが、もしこれを実現するのであれば、非常に協議の期間が短くなってしまいます。その上で皆さん方に納得していただいて前向きに進めるには、これはやはり合併協議を進めながら、同時に合併するかしないかは別のところで決定をしていかなければいけない。本来であれば、何年もかけて合併するかどうかをまず話し合っ、それで合併すると決まったら、合併協議に入っていくというのが普通の合併のあり方かもしれないのですが、尾西市の場合は、そうやった段階的な年月をかけることが、どうしてもできませんでした。

ですから、合併協議には法定合併協設立と同時に、合併するならどうなっていくのかという協議を進めながら、合併するかしないかは住民投票で来年の2月に皆様方にお決めいただくという、そういった二段構えの形をとらざるを得なかったのです。だからこそ、皆様方には、先ほどもごあいさつで申し上げましたように、住民投票には是非しっかりとご判断をいただきまして、ご参加いただきたいということを何度も申し上げているわけですが、今尾西市がそういった状況を迎えているということでもあります。

では、どうしてこの尾西市が合併をここまで協議する必要があるのか。これは先ほどの稲沢先生のお話で、これからの日本の社会がどうなっていくのかお話をいただいたわけでもありますけれども、合併をしなかったら、今の状態が続けていけるかどうか、これも一つ大きな問題であるわけでもあります。それは皆さん、今のままの生活がいいと思っていられる方がいっぱいいらっしゃると思います。だからこそ今まで尾西市がこうやって存続してきたわけでもあります。ただ、今のまま何も変わらない方がいいのではないか、今のままがいいのではないかという考えを持たれている方も、では今のままを続けることが、今後何年間保証できるのかということになります。

また、もし同じようにサービスに関しても今のままを続けようとする、これはすべて



将来に対する借金を増やしながらかつていかにざるを得ない、そういった厳しい状況がこれから訪れるのです。そういったことは何とか回避しなければいけない。そして、福祉や教育のサービスは何とか低下させないように、借金を将来にできるだけ残さないようにするにはどうしたらいいかということで、この2市1町の合併が今非常に協議されているわけでありましてけれども、これも決して尾西市だけが大変だから一宮市に入れてくださいという合併ではないということは、皆様方ももちろん自覚していただきたいというわけです。

例えば昭和の大合併のとき、私は余り記憶がございませんといいますか、生まれておりませんので、状況は話で聞くだけなのですけれども、例えば一宮市に入るか尾西市に入るか、非常に綱引きが行われた、非常に激しいそういった競争がなされたということを知っているわけでありましてけれども、あの当時の合併というのは、強いところが弱いところ、言い方が悪いですけど、大きいところが小さいところを吸収した。まさに吸収合併であったのではと、今を振り返ると感じられるわけでありましてけれども、今回は例えばこの2市1町の中で一番大きな中心となる一宮市にあっても、ここが大丈夫だから一緒になるわけではないのです。一宮市もこの先、今言ったこれからの日本の社会の動向を見たら、今のまま続けていくことが非常に厳しい。これは、2市1町のどこも同じ状態なのです。

例えば一宮市で言えば、ある程度規模の大きな市であります。今でも28万都市ということで、大きな規模の市を運営しているのですけれども、例えば効率性で言えば、非常に市の形としてもカエデの葉というか、そういったような中に木曾川町と尾西市が入り組んでいるような複雑な形で、効率性は非常に悪い。

そういったところもあると思いますし、あるいは例えば尾西市にとってみたら、効率性はしっかりとしてまとまっているわけでありましてけれども、長い目で見たら、例えばごみの処理場、これからどうしていくのか、し尿処理場をこれからどうしていくのか、これを今から尾西市単独でつくり直していくということがほとんど不可能だと言われているのです。そういったことも協力し合いながら、将来どうやっていくのか。そういうことを考えると、やはり手をとり合って、助け合っていくのがいいのではないかと。

あるいは、木曾川町で言えば、先ほどサービスの低下がある部分では協議において出てくるかもしれないということを谷さんが言われたのですけれども、これは主に実は木曾川町に一番多く発生する部分であると思うのです。といいますのは、今までの地方交付税制度というのが、町村に非常に手厚い、そういったシステムになっていたわけです。そして、それが活用されて、今までの町村の政策が進められてきたわけでありまして。ですから、今までのような国のシステムが続けば、これは木曾川町は木曾川町のままでやっても、何ら心配はないかもしれない。ところが、これが続けられない。続けていくことができないだろうということが目に見えているがために、多少サービスが落ちる部分があるかもしれないけれども、何とか将来のために、今ではなく50年先のことを考えて、合併のことに取り組まなければいけないのではないかとということで、木曾川町も今合併に向けて参加しているわけでありまして。

こういった市町それぞれのいろいろな状態があって、お互いが助け合っていくことがそ

それぞれの住んでいる住民、一つになれば一つの市民でありますけれども、そういった人たちのために一番いいのではないかという、そういった考えの中において今協議を進めさせていただいているわけであります。

それから、もう一つ、先ほどの谷さんのお話で、サービスが低下するかもしれないというお話もされたのですけれども、ただ、尾西市の場合は、どちらかというとな低下する部分は少ないと思います。これは、これからいろいろな住民投票前の、あるいは合併協議会での説明会を1月、2月と進めていくわけで、ここで本当に細かくお示しさせていただくわけでありすけれども、尾西市の場合は、感覚的に例えば100個の項目を変えていかなければいけない部分においては、70から80の部分はよくなる部分、20から30の部分が直接悪くなる部分というぐらいの、そういった感覚ではないかと思っております。

ですから、たまたまその20から30の部分に当たった人というのは、ひょっとしたら合併がデメリットと感ぜられることもあるかもしれません。これはこれで住民投票で私は反対だとおっしゃられるのでしたら、仕方ないことではあるのですけれども、ただ、全体を見てご判断をいただきたいということを思います。

それともう一つは、そういった良いこと、悪いこととは別に、今までやってきたシステムを変えていかなければいけない。組織ですとか決まりを変えていかなければいけない。これは、3つで別々にやっているところを一つにするわけですから、必要なことでありまして、今まで慣れてきたことを変えなければいけない部分、これは当然出てくると思いますが、これは長い目で見たら、当初の話だけであって、これからの長い間の運営の中でそういったものは解消されていくだろうと思っております。

例えばすり合わせの段階、いろいろな2市1町別々のことをやっていたものを一つにまとめる段階で、今は確かに短時間で決めていかなければならない部分があります。ですから、ある程度少々強引にでも一つに合わせようという流れがあることは否定できないのですけれども、例えそれが一たん決まってもこれから先、今までの3つを比べて、やはりこっちの方がよかったのではないかということも十分あると思うのですけれども、そういったところは、今まで実際に経験してきた市民、町民がいるわけで、そして、実際にそれを行ってきた職員というのも、新しい市に残るわけです。また、議員も残るわけです。そういった中で、やっぱりこれがよかったというものは、新しい市の中でもう一度協議をし直して考え直していくということも十分できることでありまして、これはやはり残してほしいなということは、十分この先長い期間をもって変えていくこと、今すぐには変えられないことでも、変えていくことは可能だと思います。これは合併の一つの大きなメリットでもあるのではないかと思います。

そういったことで、これからもどうか皆様方、しっかりとこうやっていろいろなところに参加していただきたいなと思います。

とりあえず以上であります。

○稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授

どうも丹羽市長さん、ありがとうございました。

今、市長さんから皆さん方にいろいろ語りかけられたこと、一口でまとめられませんが、大きくは、昭和の大合併のときには、いかにも吸収合併というようなイメージを持たれるような、遺恨を残すようなこともあったかもしれないが、今の平成の合併のこの時期については、一宮市さんも大きいと言いながら、支えていかなければならない、そして、合併をしなければ解決に向わない問題もあろう。そして、同じく木曾川町、尾西市さん、ともにそれぞれの問題が合併をして解決をする。合併を手段として解決はできるだということから、まさにその抱えている問題、そして、その対処法の時点で、合併が対等なのだろうというところの強調、これが一つ私は必要かなと思います。

また、なぜこの時期にということ、先ほどの私の話とも関連しますが、期限、この合併特例法において住民ができる限り皆さん方の財政にご負担をかけないような有利な条件を得るためには、今こそ話し合っておかなければならない。だけれども、その話し合いが短期間に過ぎるのではないかというようなことにつきましては、新市になってからでもまたさまざまな話し合いの中で、よいものはよいものとして残す云々の話は繰り返し広げられることもできようから、この時期に乗り遅れることのデメリットをよく理解していただきたいというような、さまざまご意見、私がかいつまんで申し上げられることでも、先ほどの谷市長さんのお話もそうですけども、幾つかあったように感じます。

どうもありがとうございました。

それでは、引き続きまして、木曾川町長、山口様、お願いいたします。

#### ○山口 昭雄合併協議会副会長

木曾川町長の山口でございます。

私も尾西市の皆さんの前でお話しさせていただくのは、これが初めてです。ただし、私の場合は、生で見ていただいても別にどうっていうほどのことありませんので、まず先に本論に入りたいと思います。

こうやって、木曾川町の皆さんはおいでになっているのかなと見回しておりましたところ、そのことよりも、今日は一宮市でやったときよりも、木曾川町でやったときよりも、若い方が多いというので、尾西市の皆さんの合併への関心の高さを感じているところがあります。どのくらいから若いということかは、ちょっと伏せておきますけども。

私は、今お三方からいろいろとお話がありましたが、この地域における合併議論が相当進んでまいりまして、それぞれのまちの特徴とか違いというもの、だんだん明らかになってきたと。それぞれの部分について調整をしているわけですが、調整し切れるのかどうかというような心配な点も出てきております。こうやって細かいところまで皆さんにお知らせすることができるようになりますと、恐らくこれから、というよりも間もなく合併論議がメリット、デメリット論争になってきて、大変厳しいものになっていくのではないかと感じております。

そういうときに我々、首長と言われますけども、が忘れていけないのは、合併の大義ということを見失わないように、我々がきちっと説明をし続けていくということだと思います。大義というのは、今は国の問題では、イラク戦争の方に専ら使われておりまして、そ

もそもあの戦争はどこに大義があったのかとか、あるいは、今度の自衛隊の派遣についても、大義についてもっと説明があるべきではないかと言われておりますが、我々の周辺では、やはりこの合併の大義がどこにあるのかということ、今再確認をしなければいけないと思います。

私はこの合併ということを考えるに当たって、まず大義の方から入りましたので、その点の一つ、大義のその1として申し上げますと、やはり先ほど来お話がある地方分権、分権改革というものが、日本がここまで来て、大きな転換期を迎えているというときに、どうしても避けて通れない問題であると考えるところであります。詳しくはもう既にお話が出ておりますが、私はそういう中でこの分権というものを進めていくためには、市町村が力をつけていかなければいけない、強くなっていかなければいけないとずっと思っていました。

この分権論議、もう既に明治のころから行われているのだそうでありまして、ちょっと前にある方の講演を聞いたとき、こんなお話が出ました。かの福沢諭吉が既に分権論を説いておりまして、その中で分権を求めていく理由として、まず、良樹細根ということをおっしゃったそうであります。良樹細根。よい木ですね、立派な木は細かいたくさんの根によって支えられているということをお説かれたのだそうであります。

これをよく考えてみますと、例えば一つの大きな根っこに支えられている木というのはもろいと。中央集権というものが、立派な国を支えていく制度としては問題があるといえますか、今この時代の変節を迎えて問題があると読みかえることができるわけでありまして、たくさんの根によって支えられて初めて新しい大きな木が育っていくという意味だと、私は解釈をしております。

それと、その先生はもう一つ言っておられまして、ダーウィンが起源論というものの中で、これまで生き残ってきた生物というのは、強いものとか賢いものというのではなくて、変化に対応できるものが生き残ってきたということを行っていると言われました。これもやはり新しい時代を迎えて、新しい体制を選んでいく。そういう変化に対応する意識がこれからは問題になっていく。そういうことだと解釈をしております。

少子高齢化だとか、経済成長が終わったとは言えませんが、終焉を迎えて安定成長と言われるようなときには、その成長の意味が求められるわけでありまして、やはり成長は量ではなくて、これからは質というふうに判断をしていかなければいけない。それが新しい体制をもってどんな国をつくっていくかということになっていくのだと私は思っております。

そこで、大義のもう一つとしましては、ずっと分権を支える新しい自治の仕組みをつくっていかなければいけないと、私は考えております。一宮市にも尾西市にも、そういった自治の仕組みを変えていこうという市民グループといいますか、そういった方たちがおられることを知りまして、大変力強く思っておりますが、例えばこれまでのように上から下への伝達機関としての役割としての、例えば区とか町内会ということを見直しまして、一つのコミュニティといいますか、一番生活に密着した一つの範囲の中から生まれてきたも

のをだんだんと積み上げていって、下から上への機関というものにつくり変えていくということが必要なのではないかと考えております。

それと、もう一つの大義、今途中で一つ差し挟みましたが、これ大儀1.5と考えてください。大儀の2は、私は心の豊かさが育つまちづくり、住民主役ということだと思いません。こういうことを求めて合併というのは行われていかなければいけない。今言いましたように、成長の中身が問われる時代になってきたということでもあります。

そこで、私はこれに対して一番私自身が重視していることは、新しいまちになってからの教育・文化、そして保健・福祉、これをいかに充実させていくことが、新しい市に問われていると考えております。私は、これが新しい時代の、いわゆる地方の時代と言われる改革の嵐を受けとめる最大の武器になっていくと考えているからであります。そのために、先ほど1.5のときに言いましたそれぞれの住民のパワーが一番発揮しやすいコミュニティのあり方というものを考え直していく必要があるということでもあります。

それから、次に大義のその3としましては、先ほど来、中核市という話が出ておりますが、私は、この合併によってこの地域が市としてグレードアップしていくということと、それによって他に発信していくブランド力をつけるということが、大変大切なことになるのではないかと考えております。

その中で、ただくっつけばそれなりの新しいブランドが生まれるとか、グレードが上がるという問題ではありませんで、私はこれから大切なことは、大きな一宮市、ここにはやはり一番高い都市的な機能が集約されていかなければならないとは思っておりますが、尾西市にも中ぐらいの、中ぐらいと言うと失礼になりますので、ほどよい大きさの尾西市には、やはりそれなりの一つ核になるようなまちができていかなければならない。そして、一番小さいと言うと、もし木曾川町の人がおられると怒られますので、きらりと光る木曾川町のあたりは、やはりそれなりにこの大きな市を支える一つの核になっていかなければならないと思っております。あっちにもこっちにも核がひしめき合ってどうするのだということになるかと思いますが、そういうものがお互いに争って、争うという言葉おかしいのですが、物はもみ合うと熱が出ます。そういう形で新しい市の活性化を生み出していくということが大切かと思っております。

3つの大義、これをこれからもう少しわかりやすい言葉で皆さんに説明をしていきたいなと思っております。

以上です。

#### ○稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。

今、山口町長さんからは、合併の大義、こちらを3つに整理されて、1つは、地方分権、この時代の変節点にあって、地方分権というその流れをとらえたこちらのお話から、1.5とおっしゃっていましたが、上から下への伝達機関だったところから、下から上への意思を伝える、そういったコミュニティづくりを経て、そして、住民主役のまちづくりへというようなお話から、さらに3つ目といたしましては、中核市をもって、その地域か

ら発信するブランド力を持つ、グレードアップを図るという中で、一宮市、それから尾西市、木曾川町、それぞれが特性、個性を生かしながらこの地域をさらにブランド力を強めていくというようなお話があったかと思えます。

それでは、一回りいたしましたところで、次の話題に入ろうと思うのですが、今こちらご列席の3人の首長さん方は、みんな一宮市・尾西市・木曾川町合併協議会の中で、今、日夜お仕事をされておられます。そのような中で、今皆さんのお手元にもあるかと思えますが、この一宮市・尾西市・木曾川町新市建設計画検討素案の概要、こういったものの検討を進められておられます。

そして、こちらに書いてございますのは、これから新しい市をつくる、その市のあり方を検討されている。そのほかにも総務文教小委員会、厚生小委員会等さまざまな小委員会の中で細かな議論を詰めていっているわけですが、皆さんのお手元にあります一宮市・尾西市・木曾川町新市建設計画検討素案の概要、この資料に基づきまして、新しいまちをつくっていく、そのビジョンの中核はどんなものなのか、あるいはまちづくりにおいて、それぞれの首長さん方はどのようなことが重要だとお考えでしょうかということ、谷市長さんから、恐縮ですが、こちら検討素案の概要、これの全般的なご説明からしていただきまして、そして、さらにそれぞれの首長さん方に個別、具体のお話を続けてしていただければと存じます。よろしく願いいたします。

#### ○谷 一夫合併協議会会長

私どもの合併協議会は、全体の合併協議会、35人のメンバーですが、この合併協議会を小委員会に分けまして、そういう方式で議論を進めております。その小委員会の中に、今ちょっとご紹介がありました新市建設計画策定等小委員会というのがありまして、この小委員会だけは私ども3人も参加をしております、最も基本的な部分のことを相談して決めていこうと、こういう委員会でございます。

既に新聞等でも報道されましたのでご承知かと思いますが、まず、合併の方式について、これは新設方式と編入方式と2つあるわけでありまして、私どもの場合は「対等合併編入方式」と、こういうことになりました。つまり、対等の精神で合併をする。しかし、法で定められた方式としては、編入方式という方式をとりますよと、こういうことが決まりました。

それからまた、役所の位置をどこに置くかということ、これもなかなか難しい問題でありまして、地域によってはこのことだけで合併が失敗になったところもあるわけでありまして、私たちの場合は分庁方式ということを採用することになりました。つまり、一宮市の市役所、そして今の尾西市の市役所、木曾川町の町役場、これらをそれぞれ庁舎として使わせていただくということでございまして、尾西市の市役所には新しいまちの市役所のある一部の部門が入らせていただく。木曾川町役場へもある一部が入らせていただく。どこへ何が入るかはこれからでございますけれども、そういった方式をとりたいと思っております、なおかつ今の尾西の市役所では、皆様方が通常の市民生活を営まれる上で必要な手続等については、余りご不自由されることがないように、今と余り変わりが

ないように、そういったサービス部門をきちんと確保していこうと。こういったようなことが決まっております。

今最後の難関であります新しい市の名前をどうするかということで、今5つの候補がそろっておりまして、年内にはこれも決めていきたいと思っております。その段階に来ております。

今お手元で見ていただいておりますこの冊子、ちょっと中を開いていただきたいと思いますが、これから新しいまちをどういうふうにつくっていくのかということの基本設計と申しますか、基礎的な部分がここに記載をしております。

左の方に安心・元気・協働という3つのキーワードが書いてございます。これは最も基本的な考え方のベースでありまして、皆さんがあるまちで暮らしていかれるときに一番大事なこと、必要なことは、やはりこの安心ですね。安心して暮らせる。いろいろな意味で安心して暮らせるということが一番大事でありますから、安心というキーワード。

それから、今私どものまちも、日本全体もそうかもしれません、一番必要なのは元気ですね。元気がありませんので、何とか元気を出して頑張っていこうという意味で、元気というキーワード。

そしてまた、先ほど木曾川町長さんのお話の中にもちょっと出てきておりましたけども、行政と市民、町民の皆さんが力を合わせて新しいまちづくりをやっていこうという協働ですね。ともに力を出し合って頑張っていこうという協働。

この3つのキーワードを掲げております。

そして、将来像といたしましては、なんといたっても木曾川という日本人ならほとんどの人が知っている大きな川に、新しいまちの北側から西側がずっと取り巻かれることになるわけでありまして、この「木曾の清流に映え、心ふれあう躍動都市〇〇」と、こういった将来像を掲げております。

そしてまた、新しいまちをつくるための7つの礎ということで、一番上には、保健・医療と福祉の充実、2番目には、生活環境の整備、3番目には、産業の振興、4番目には、教育・文化の振興、5番目には、都市基盤の整備、6番目には、住民参加・コミュニティの推進、7番目に、行財政基盤の強化と、こういった7つの礎に基づいてそれぞれの政策を立て、事業を進めていこうと、こういったことを考えております。

事業例として幾つか書いてございますが、これが今相談をしている部分でございまして、これは原則としてはそれぞれの市町の総合計画というのがございますが、私どもどこの市も町もこういった10年間の総合計画に基づいてまちづくりを進めておりますけれども、それぞれの市町が今持っている総合計画に記載されている事業、これは原則としてここに掲げてございます。その中でいろいろすり合わせをいたしまして、同じようなものがあればそれは一つにまとめたり、そういうことで整理をしてここに掲げてございまして、合併をするから新しく何かやるというようなことはほとんど入っておりません。

合併をしなくても当然それぞれの市町でやるであろうという事業がここに掲げてあるわけございまして、先ほど特例債の話も出てまいりましたけれども、特に合併をするから

とって、特例債を湯水のごとく使って、借金を増やそうということを考えていないわけでありまして、むしろ、合併をすることによって効率のいい事業推進が図れるようなことを一所懸命考えてやっつけていこうと。決して無駄遣いはしないようにということは十分に考えておりますので、その辺はどうかひとつご安心をいただきたいと思っております。

こんなような形で今議論を進めておりまして、まだこれはたたき台とお考えいただいでよろしいかと思っております。まだ現在も進化を続けておりまして、ここから若干また変更していく部分もあるかと思っておりますが、一応たたき台として我々が今議論をしている土台でございますので、そのようにご理解をいただければと思っております。

木曾川ということの一つ申し上げますと、今の尾西市が木曾川に接している長さというのは6.4キロなのですね。これは合併して、一宮市の浅井からずっと尾西市の一番南の外れまで行きますと、18.7キロになります。非常に長い距離を木曾川に接する、そういったまちになるわけでありまして、この木曾川沿いの整備、利用というのは、大変大きな一つの目玉になるだろうと思っておりますので、是非また皆様方のご意見をいただきたいところであります。

こんな形でこれからまた議論を進めていきたいと思っております。

#### ○稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。

谷市長さんからは、こちらお配りしている資料について、新市建設計画検討素案の概要につきまして、特にこれまで合併協議会が進めてきた内容、対等合併編入方式で進めること、庁舎は分庁方式とすること、そして、新市の名称については、今5つの選択肢から選択をする段階にあることをご説明いただいた後、この資料の概要をご説明いただきました。

続きまして、丹羽市長さん、そして山口町長さんと、こちらのやはり新市建設計画策定等小委員会のメンバーとしていろいろな議論に参加されている中で、また、個別、具体的お話等、お感じになっている点、お考えになっている点ございましたら、よろしく願いいたします。

#### ○丹羽 厚詞 合併協議会副会長

それでは、私からは、先ほど山口町長さんからも少しお話が出ましたけれども、この地域をこれからの地方分権を迎えるに当たって、これからの地域間競争に勝ち抜いていかなければならない、この新しい新市が勝ち組に残るにはどうしたらいいか、そういったことがこれからの将来のまちづくりにおける重要課題、中核となるものだと思います。そういったお話をしたいと思っております。

先ほど稲沢先生の方から、これからは地方分権が進められるというお話がありました。これ歴史的な話をしますと、実は日本というのは明治時代に民主主義になったわけでありましてけれども、とにかく富国強兵を進めなければいけなかったがために、地方分権ができませんでした。中央集権で、中央が指導をとって進めていかなければならなかったのが、時の伊藤博文等がプロシアの政策をとるかイギリスの政策をとるかというときに、プロシアの政策をとりました。帝政プロシアの中央集権をとったというわけでありまして。



本来は既に世界的には地方分権が進んでいるべきところであるのですけれども、日本の今の状態が少し特別な状況だということの上で、地方分権自体も世界の流れの中で進めていかなければならないという話であるわけですが、それ以上に、先ほど言いましたように、地方分権というのは、これからの少子高齢化に向かうに当たっての国の財政を何とか無駄のない、効率のいいシステムに変えていくための非常に重要な政策であるということで、今取り上げられているわけです。

その中で、ではどういうふうに変わっていくのかといいますと、地方分権をすれば、地方の主体性によっていろいろな政策を決めていくことができます。ということは、地方同士でいろいろな競争、いわば企業で言えばお客さんの取り合いが行われるわけなのですね。

例えばこの新しい市の根幹をなす税収を上げていくにはどうしたらいいか。工場を誘致して、産業を盛り立てていくのか、あるいは住民をもっと呼んできて、住民税等で何とか税収を上げていくか、そういったことが課題となってくるわけですが、そういったことにおいても、隣のまちとの競争ということから、いろいろな独自の政策が展開されていくだろうと思います。

実はつい先日、国の方からの方針ということであったのですが、今まではいろいろな税率についてもほとんど各市町一律だったのです。ちょっとずつ特別に加算できるところがあるというのはあったのですが、ほとんどにおいて市民の皆さんに課せられる税率というのは一律だったのですが、今後これは場合によっては変えてもいいという方針が国から出されたばかりであります。これは裏を返せば、苦しいところは税金をどんどん上げていきなさいと言っているようなものなのです。今まではそれができないから、国が地方交付税制度ということで地方にお金を渡してきました。ですが、これからはそれができないから、「もしあなたたち、自分たちでできないのだったら、税金を上げてでも自分たちでやりなさいよ」と言われているようなものだと私は感じたのです。

そうしたら、地方間競争で勝ち組にいった自治体はどうなるかという、これは工場も誘致できます。あるいは若い人たちが大勢越してきてくれて、そういったことで税収を上げます。それであれば、税金は上げるどころか、ひょっとしたら下げることもしれません。ところが、そういったことができない負け組に入った地方自治体というのは、やはり税収を上げて、税収を上げるためには税金の税率も上げなければいけません。これは逆に本当にどんどん勝ち組と負け組の格差が広がってしまいます。そういった事態もこれから先の地方においては起こり得ることではないでしょうか。

そのためにも、地方間競争には勝ち抜いていかなければいけません。それだけ大きな財政力とそしてしっかりした計画と、あるいはしっかりした能力を持った、そういった自治体の運営を図っていくことが一番必要になるのではないかと、まず、この合併における重要なポイントではないかと思えます。

そして、まちづくりにおいては、当然中心となる、まちの顔となる部分は、今の一宮市の駅前、あの周辺というのはやはりほかの地域から見たら、名古屋から、岐阜から見たら、やはりこの新市の顔であります。今のうちにちょっと寂れてしまったような形ではな

く、やはりもう一度盛り返していただきたいと思います。

そして、そういった顔をもって、新しい新市のイメージを打ち出していきながら、名古屋からも岐阜からも10分少々で来れるこの新しい新市の、少し車で10分も行ったところに素晴らしい自然と生活環境を持った住宅地がある、こういったところにおいて、こういった周辺部、例えば尾西市の部分、木曾川町の部分、あるいは周りの大和町である部分というところは、真ん中でまず新市のイメージを打ち出していきながら、それを支える基盤となるエリアとして、しっかりと住民の生活を一番に考えた開発をしつつ維持していくべきではないでしょうか。

その上で、合併をするわけでありますから、一つの市になっても、エリアエリアでいい部分というのは、残しておく。例えばびさいまつり、10月に盛大に行わせていただいたわけでありまして、また、夏祭りもこの地方でも本当に特大な祭りとして継続しているわけでありましてけれども、こういったものは是非とも新市になっても当然継続していくべきものであり、それがこの地域の一つのまとまりを示して、これからの活性化に一つ結びついていくものだろうと思います。

そういった地域地域のいいところはいいところとして残して、ただ、一つの市としての顔の部分というものはやはりそういったところでの開発を大きく手がけていって、先ほど木曾川町長からもありましたように、ブランド力をもっと育成していく。そういったことにおいて、この地方でも勝ち組に残ることが必要なのではないのでしょうか。そういったことにおいて、新市の建設計画を進めていくべきではないかと思っている次第であります。

以上です。

#### ○稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。

勝ち組という言葉キーワードとして、何度もその意義を語っていただきました。その地域の顔を育てながら、つくっていきながら、そして、この新市が一体となって、勝ち組となっていく。その勝ち組となっていった結果というのは、まさに住民の皆さんに、あるときは税金で、あるときはサービスでという形で跳ね返ってくるのですよと。そのために勝ち組となるその力をつけるということを繰り返し強調していただきました。

続きまして、山口町長さん、お願いいたします。

#### ○山口 昭雄合併協議会副会長

まず、一宮市長さんから新市建設計画の素案の概要についてご説明がありまして、また、丹羽市長さんからはその内容に触れていただきましたが、私は、くどいようですが、この新市建設計画にもやはり大義がちゃんと示されなければならないというふうに思います。

この大義という言葉なのですが、神田愛知県知事もご愛用の新明解国語辞典というので調べてみますと、「他に対して後ろめたさを感じないで何かをやっただけの、恥ずかしくない理由」と書いてありまして、大変わかりやすいのですが、やっぱりプランがそういうものになっていかないと、丹羽市長さんではありませんけど、ほかに負けます。そういうようなまちづくりしかできない合併だったら、我々3人、責任をとらなければ

いけないということになりますし、そういう合併ならばやる必要はないということになります。

そこで、どうやってこの新市建設計画をつくっていくかといいますと、ハードの面では特に、私は、以前一宮、尾西、稲沢、木曾川、祖父江、平和の6つの町の首長と商工会議所、商工会の会頭さん、会長さん、一緒に6人、2台のヘリコプターに分乗して、この地域をずっと300メートルの高さから見たことがあるんですね。こういった目でこの地域を見ながら、なかなか実際にしょっちゅうヘリコプターで飛んでいるわけにもいきませんが、そういう目でこの地域を見ながら、あるときには、さっきも言いました教育・文化の目で見えていったら、この地域は一体これからどうなっていくべきであろうとか、あるいは福祉・保健というようなどころで見えていった場合には、ここはこうなるべきではないか。産業・経済の面ではこうなるべきではないか。つまり、このあたりが例えば産業・経済の中心に

なっていくべきだなと。その周りはどうしていったらいいのかということ、本当に鳥の目といいますか、高いところから見おろした目で作りにあげていくということが大切だと思います。

ハードの面では、以前一宮市でシンポジウムがあったときには、やっぱりこの地域を太陽系に例えると、一宮市の中心部、先ほど丹羽市長も言われましたが、あのあたりを太陽として、一宮市のほかの地域とか尾西市とか木曾川町が、例えば尾西市は大きいから木星とか土星ぐらいの感じで、木曾川町はちょうど地球ぐらいの感じで太陽の周りをぐるぐる回っていくという、そういう秩序だったまちづくりをしていかなければいけない。

ただし、ソフトの面では、あるところでは、例えば尾西市が太陽になってほか回っていくということが考えられるし、木曾川町でもひそかにそういうことを考えております。この部分では絶対に木曾川町が太陽になって、ほか回っていくのだ。それで、秩序が保たれるかどうかはよくわかりませんが、そういうような一つのまちとしての本当にきれいな姿というものを描いていく必要があるかと思えます。

そういうことによって、このプランがだんだん埋まってくると、市民の皆さん方にお示しして、本当に納得していただけるものがこれから必ずできていくと思います。既にそういうものが、先ほども出ましたが、新市建設計画作成等小委員会では煮詰まりつつありますので、またそういうものを皆様方、積極的にご覧になって、皆様方も今後のまちづくりというのがどうあるべきかを一緒に考えていっていただきたいと思えます。

そんなところです。

#### ○稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。

山口町長さんからは、先ほどに引き続きまして、大義ということをお話いただきましたけれども、今度はまたアプローチを少し変えられた形で、この銀河系宇宙に例えられたと。木曾川町を地球に例えられているところがなかなか憎い心遣いだなと感じますが、先ほどの丹羽市長さんのお話の中でも、中心・周辺という言葉、出ていらっしやいました

し、また、山口町長さんもそのようなことをおっしゃいましたけども、恐らくお二人のおっしゃっていることは同じであろうと思って聞いていた次第です。

つまり、一つの地域が発展していくためには、1中心点のみではなく、教育、そしてまち、商業、さまざまな意味での中心があろう。そして、なおかつ今、市とまちとの境というのが、境界線ということであります。尾西市にはその境界線の周辺という、ご自分の今、尾西市の市域というものが周辺という形に、当然今の枠の中でありますけども、これ一つになれば、その周辺と言っている場所はきれいに境界線がなくなるわけですし、境界線自体が一気に短くなる、なくなってくるわけです。

であれば、さまざまな中心がこのまちづくりの中にあってもよいだろう。そのさまざまな中心のつくり方によって、総合力が発揮されていき、まさに鳥が空から見るように、大きなまちづくりがなされることによって、地域間競争に勝ち抜けるという、今3人の首長さん方の一つのこのまちにかける期待というようなものを私は感じた次第です。

そろそろこれを最後の話題にさせていただきますけども、また、一宮市長さんからお聞きしますが、今皆さん、市長さん方、町長さん方が日夜本当に取り組んでおられますこの2市1町の市町村合併を成功させたい、その意気込みで取り組んでおられる、その成功に向うための要因、ツボ、押さえどころ、そういったものは何だとお感じでしょうか。よろしく願いいたします。

#### ○谷 一夫合併協議会会長

1つ挙げるとすれば、私はやはり信頼という言葉じゃないかと思います。相互信頼。つまり、我々3人の間がいかに信頼関係で結ばれているかということ、そしてまた、私どもと市民、町民の皆さんとがいかに信頼関係で結ばれるかということ、これが一番の基本、大事なことだろうと思います。

そして、その信頼を勝ち得るための一番大事なことは、これはやはり情報公開ということが一番大事だろうと思うわけでございます。私どもがどんなことを考えて、どんなことを話し合っているのかということが、すべて皆さんに明らかにされるということが一番大事なことでありまして。私どもの協議会、あるいは小委員会はすべて公開でございますので、傍聴可能でありますし、少し時間がかかりますけれども、二、三週間後であれば会議録もすべて公開しておりますので、インターネットで閲覧いただくこともできますし、それぞれの市町のしかるべき場所でご覧いただくことができるわけでございますので、是非そういった情報を入手していただいて、先ほどの山口さんのお話ではありませんが、皆さんもお知恵を出していただきたいと思いますと思っております。

ちょっと私、冒頭のところで、皆さん方のサービスが下がることあるかもしれないとか、余りにも正直に言い過ぎてしまったなと実は思っているのですが、尾西市は住民投票があるのですね。住民投票がありますので、しかし、こういうことも含めて是非ご理解をいただいて、いいことばかり言っておいて、後になって谷はうそを言ったと言われても困りますので、やはりこれは本当に正直な話、そういうことでございますから、ひとつ賢明にご判断をいただきたいと思っております。

実は、こんなこと言っていていいかわかりませんが、先ほど合併方式が対等合併編入方式と決まったと。編入方式ということは、もし合併ができて新しい市ができたときの初代の市長は不肖私になるわけでございますので、皆様方が今日、ちょうどこれで2時間半ぐらいになりますが、私をご覧いただいてどんな印象を持っておられるか。こういったことも合併の成否に大きな印象を与えるのではないかという意味で、そういう意味で改めて若干の緊張感を覚えているわけであります。

いずれにいたしましても、山口町長さんから、一宮市は太陽だと、すばらしい例えをいただきましたので、夕日でこれから沈んでいく太陽とか、日食で真っ暗になる太陽とかではなくて、どんどん昇っていくような朝日のような太陽になりたいと思っておりますので、どうかよろしく願いをいたします。

**○稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授**

続きまして、丹羽市長さん、お願いいたします。

**○丹羽 厚詞 合併協議会副会長**

この市町村合併を成功させるためにはという事で、一番私は、この木曾川町の会場でも一宮市の会場でも訴えてきたことがあります。それは、まだまだ一宮市の皆さん方は変わらないだろうという意識を持っている方が大勢いらっしゃるということなのですね。これは、先ほども申し上げたように、一宮市でもこの合併を契機に変わっていく、この合併があるからこそ、これからの将来やっていけるのだという、そういった思いは当然持っていたかなければいけないということと、そういった思いで進んでこそ、今度の合併が後になって、合併してよかったなという合併になるということは、私は感じているのです。

ですから、もし合併をするとなった場合は、合併した後も一宮市の皆さんに訴え続けていくべきことだと思うのですね。

ある講演会で、今行われている日本全国の合併協議について、合併した後、あるいは合併しなかったら後で、どういう評価を得られるだろうかという例え話の中で、多分半分以上のところ、こんなことなら合併しておいた方がよかったのではないかとということと、こんなことなら合併しなかった方がよかったのではないかと。こういったところが半分以上を占めるのではないのでしょうか。これは裏を返せば、どっちであっても、どちらかになる市町であろうと。この合併というものを、国から押さえつけられたもの、そういった単に受けとめるだけのものであると感じている以上、合併した後は、合併しない方がよかったのではないかと感じてしまうし、合併しなかったら、した方がよかったですと感じてしまうでしょう。

この合併というのは、合併してよかったなという、評価を得るためには、私たち市民一人一人、そして職員一人一人、議員さん一人一人、そして首長、全体がやはり合併に向けて、合併でこのエリアを変えていくのだ、そういった強い思いが一番必要なのではないかと思います。

**○稲沢 克祐 四日市大学総合政策学部助教授**

お願いいたします。

## ○山口 昭雄合併協議会副会長

私、一貫してそうなのですが、この合併で大切なことは、小さいところほどでかいことを言うということだと思っています。ずっとそうしてきました。

例えば、大きくなればなるほど、周辺が増えるということが言えるかもしれませんが。しかし、周辺には周辺の存在価値があるはずだから、さっき言ったように、そこを太陽にしてほかが回っていくというような意識で、大きな声を出していくということが大切だと思います。合併をする作業の中でも、してからも、そうではありますが、尾西市でも、例えば周辺と言われるところがあるかもしれませんが、まだいいですよ、木曾川町よりは。何せ市ですから。うちは郡ですから。その周辺というのがどんな思いをしておられるか、それを私もよく考えてこれからはやっていかなければいけないなと思って、余計大きな声を出しています。時には大型瞬間湯沸し器と呼ばれて、手をつけられなくなることもあります。

それともう一つは、さっき勝ち組という言葉が出ましたが、やはり競争の時代になります。そのときに勝ち残っていくためには、みんなでこの地域の売りは一体何か、何を売っていったらいいのかということを考えていくことだと思います。私、今、愛知県の中で東高西低と言われて、もともと愛知県というのはあっちもこっちもものづくりの盛んなところ、ものづくりの得意なところだったのですが、今愛知県でもものづくりというと、東の方の自動車のことばかり言われますけど、こっちの方が本当は先輩なはずなのです。こういったものづくりということをよく考え、大事にしていく。

それと、一宮市は門前町として栄えてきました。商業のまちとして栄えてきたところでもありますね。その周辺もそうであったはずですよ。

だから、私は、人と物の流れがこちらに向いてくるようなまちづくりということを考えていかなければならない。ものづくりと、人と物の流れ、交流というところに焦点を当てて、この地域の一体何を売るのか。それがさっき言ったブランドです。ブランドはみんなで作っていかなければできない。ある企業とある企業が、大きな企業があればまちのブランドになっちゃうということはありませんので、私はそれをみんなで一緒にやっていきたいなと。

だから、これからこの合併で一番大事になるのは、住民参加だと思います。

以上です。

## ○稲沢 克祐四日市大学総合政策学部助教授

どうもありがとうございました。

谷市長さんからは、まず、相互信頼という言葉の中で、サービスの低下もというような正直なことを申しましたがというようなお言葉ありました。正直なことをおっしゃるから信頼は得られるのでしょし、そのことをすべて情報公開という形で皆さんにお見せしているというのも、本当にこのように皆さんに正直にお伝えできるからこそ、情報公開されたものも、そのままありのままの姿なのだろうということが感じられます。

また、丹羽市長さんから、これは非常に物事の見方でございますけども、合併して、こ

れはまずかったなど。これは押しつけだと思って合併すればそうなるでしょうし、いや、この合併を今一つの転機として、このまちが勝ち組になっていくそのチャンスだと思って取り組んでいけば、合併してよかったな。物事を両面から見れば、必ずよい方向に見て取り組んだ方が、これは勝ち組になるための大切な見方だということだろうと思います。

そして、山口町長さんからは、ブランドと。人、物の流れがこちらに向いてくるというようなブランド力を持たねばと。確かに、私も今三重県に住んでおりますけども、この地域を見れば、この地域の中にJR、それから名鉄、私鉄の駅が19も存在している。まさに交通の要衝であって、人の流れが集まってくるような場所でもある。

また、先ほど谷市長さんもおっしゃいましたが、丹羽市長さん、それから山口町長さん、順におっしゃってございましたけども、木曾川というこの日本の財産を18.7キロメートルという長さにわたって共有する、そのような地域でもあると。そういった形で、この地域の持っているポテンシャルは物すごく大きいものがある。それを本当にポテンシャルとして生かすには、今のようなモジミのような形がよいのか、地域としてまとまって、37万人規模の中核市をつくるのがよいのか。これはおのずと皆さんの中で整理していただきたい事実だろうと思います。

以上をもちまして、私、そして3人のパネリストによりますパネルディスカッションを終了させていただきまして、これからはマイクを司会の江崎さんに戻しまして、フロアの皆さんとこちらパネリストの皆さんとの質疑応答の時間にさせていただこうと思います。どうもこれまでありがとうございました。

それでは、よろしく願いいたします。

## ○司会

ありがとうございました。

それでは、ここからは質疑応答ということで、会場の皆様からご質問、またご意見を受け付けさせていただきたいと思います。

また、ご発言の前には、どのパネリストの方にご質問なのか、おっしゃっていただいでからご発言をお願いしたいと思います。

それでは、ご質問、ご意見のございます方は、挙手をお願いしたいと思います。

では初めにお手を挙げられました前の方、お願いいたします。

それでは、お願いいたします。まず、どの方にご質問なのかおっしゃっていただいでからお願いいたします。

## ○質疑者 A

尾西市長さんにお尋ねをいたします。

先回、尾西市議会の12月定例議会を私は傍聴いたしました。そのときにある議員から、尾西市の合併協議会委員の中に、公募委員というのがございます。各市とも11名の中に2名の公募委員が出ているはずでございます。この公募委員の中に、公募委員でない、いわゆる圧力によってある議員が指名した委員が出ておるのではないかとという質問でございました。市長さんの答弁には、そんなことはないはずですよということで、このやりとりは

まだ結論が出ていないように思います。何か解決がしてないというように思っております。こんな重要なことは、こうして何回シンポジウムをやられても、無駄だと思います。公募でない委員を公募だといって出しておられるようなことでは、市民を欺くのもほどほどにしたいと思っています。ご答弁をお願いいたします。

**○丹羽 厚詞合併協議会副会長**

そんなことは決してありません。しっかりと公募要綱に従って応募していただきまして、その中で名前を伏せて採点をして選んだ結果が、このお二人であります。それについては、質問された議員さんから、それではその応募した原稿を見せてくれということをおっしゃったので、これは隠す必要もございませんので、公開条例にのっとって言っていただければ、当然公開させていただきます。ということをこちらから申し上げました。それで決着がついております。決してそんなことはございません。

**○質疑者 A**

聞くところによると、その公募委員は前から委員をやっておられる議員の最も信頼できる人だそうでございます。一心同体の関係にある人だそうでございます、聞き及びますと。それではどうしても。同じ地区でそのお二人は全く一心同体だという皆さんのお話でございます。だから、気分が不快になるばかりでございますが、その点、よく調査をされましたか。地域的にもたった11名の尾西市の委員でございます。どのようにお考えかお答えください。

**○丹羽 厚詞合併協議会副会長**

本論と外れますので、このぐらいで決着しようと思っておりますけど、結局名を伏せて審査をしているわけですから、その人がどういう人かということ、こちらはわからない状態で審査しているのですから、たまたまひょっとしたら後でその結果を知った人はそういうふうにも思われたかもしれませんが、審査をしている私たちはだれがだれかわからないのですから、地域的に分けてくれと言われても、それは不可能です。

結局、地域的に後でいろいろと考えを入れさせていただいたのは、それ以外のところで地域代表という方が1人、枠としてありました。その公募委員さんを決めて、あと青年代表、女性代表というところで決めた後で、ざっと地域を見たら、朝日の方がいらっしやらなかった。ですから、朝日の方の区長さんにお声かけをして、地域代表として入っていただきました。そういった調整はとらせていただきましたけれども、公募委員さんを決めるときは、無記名で審査をしているわけですから、どの人がだれの支持者だったり、どの地区にいるかということは、全くわからないわけですから。そういうふうと言われても、言いようがないわけです。

**○司会**

ありがとうございました。

じゃ次の方ということでよろしいでしょうか。

まずどのパネリストの方にご質問かお願いいたします。

**○質疑者 B**



祐久八間城のシミズと言います。

山口町長、あなたが一番大きく見えます。

合併については、今、丹羽市長さんが合併という問題で取り組んでみえますもので、私は丹羽さんのファンですから、合併に賛成でございますが。

それで、丹羽さんと一宮の市長さんにちょっとお願いしたい質問があります。

丹羽市長に対しては、この間、尾西の市議会の選挙がありました。この選挙に、合併の問題についてお話しする議員さんは非常に少なかった。なぜこの合併の問題、この大事な問題をあの市会議員選に何で公表しなかったかなと思って。

なぜなら、最終的には彼らの投票で決まるわけですよ。我々が住民投票をして、それが50%割れたら開票しないという暗黙の了解か何かあるそうですが、そうすると、彼らが何も説明しなくて、そのまま当選して、彼らに我々は任せなければいけないのですよ。その前に尾西の広報がありますね。あれにたまたま載せるとか、彼らの意見を。

ということは、今の話、一番下で当選された方でも、1,000人の方がわざわざあそこまで行って名前を書いたのですよ。こたつの中でミカン食いながら書いたわけの投票じゃないのです。そういうことを思えば、彼らたちも真剣に考えなければいけないと思います。

今の話、議事録か何かの議会報告とかという紙でも結構ですが、あれに今の話、おれはどう思うと。要するに、あなただけが一所懸命やっているだけで、あとの市議員さんはあなたに協力してないような気がして気の毒で意見を申しているわけでございまして。

だからそれで、山口町長さんの方も、谷市長さんの方も、議員さんはそういう協力はないのですか。

その後にもう一つ質問があります。それちょっと済みませんが、尾西の場合はわかっておりますから、一宮市と木曾川町でちょっとお願いしたいんですが。今の質問でございませぬ。

#### ○丹羽 厚詞合併協議会副会長

今回の市議選では、皆様方も選挙広報を読まれて、それを感じていらっしゃる方も大勢いらっしゃるかと思います。ほとんどの方が合併については余り賛否をはっきりと載せず、住民投票の結果を尊重するという立場をとられている方が大勢いらっしゃったかと思えます。

ただ、これは、もし住民投票をやるということを書いていなければ、ひょっとしたらこの選挙ではっきりと賛成派、反対派ということが分かれて選挙戦になった可能性もなきにしもあらずと感じておりますけれども、市議員の選挙というのは、いわば一つ地域選挙ということもあるわけなのです。そういった複雑な状況の中で、住民投票がこの2月にあるという状況で、はっきりと言える議員さん、言えない議員さん、それはそれぞれだと思います。

ですから、あくまでも私がお願いしたいのは、先ほど内部で取り決めと言われたのですけれども、50%以下で、開票しないというのは、これ条例上にはっきりと載せて、きちんと決めた条例でありますので、そのとおりのことをやらせていただくのですが、とにかく

投票に行っていたきたい。これは、逆にそれだけ投票率が上がらなければ、一部の方の意見としてとられかねない。そして、もう一つは、そうやって50%というラインを決めることによって、それを乗り越えなければいけないということをお願いすることによって、とにかく大勢の人にこの尾西市の将来を決めていただきたい。そういった願いで50%以上という、そういった開票ラインというのを決めさせていただいているわけでありますので、とにかくまず超えていただきたいということをお願いするわけであります。

その中で、議員さんがどう判断されるか。もし、50%満たなかったときにどう判断されるかというのは、それぞれの議員さん議員さんのお考えではあるかと思えますけれども、これも冷静に今までの協議会の動きを見て、しっかりと判断していただけると、私は思っております。どういう状況になるか、はっきりと結論は、もちろん私がするわけではありませんで言えませんが、もし開票できなかつたときは、その時点での市民の皆さんの考えを何とか議員さん一人一人は感じていただいて、それを議決に表してきていただけるだろうということは思っております。

以上です。

#### ○谷 一夫合併協議会会長

一宮市の議員さんはどんな態度かというお尋ねでございますが、一宮市は市会議員さん、36名おいでになります。その中で反対の方は3名でありまして、いずれも共産党の議員さんでございます。残り33人の議員さんは協力的な立場でいろいろとお助けをいただいております。

#### ○山口 昭雄合併協議会副会長

私が一番大きく見えるというのは、実際に私が一番大きいからです。

それで、木曾川町ではどうかということですが、実は私、この合併を新設にするのか編入にするのかという方式の議論があったときに、私はそういうことはずっと先にした方がいいと考えてきましたが、例えばいろいろな特例があるのですが、議員さんの特例などを決めるのに、それを担当する委員会の方で、できるだけ早く方式を決めないとそういうものは決まらないということで、ちょっとこの時期を早めたわけです。

そのときに私が、自分の身分保障を他に優先させるというのは私にはわからないという発言をしたら、これ協議会か小委員会だったのですが、そしたら、それが新聞に名前入りで載りまして、うちの議会は大変なことになりまして、町長は大変けしからんことを言っていると。自分たちはそんなことを考えて議論をしているのではないということで、本当にその後、特別委員会というものを今立てて議論をやっておられますが、その中が本当に湯沸し器のような状態になっておりまして、私は、そういう意味では、議論の活性化に私の危険な発言が役に立ったのかなと思っております。

議員さんたちは、協力とか非協力というよりも、今一所懸命、この合併は本当に住民のために必要かどうか考えておられます。

#### ○質疑者B

ありがとうございました。

それで、もう一つだけお願いしたい。一宮の市長さんをお願いしたいのですが。

市長さんが先ほど地域のことは地域がわかると言われました。それで、地域のことは地域がわかるのだけれども、私が今住んでいるところは、要するに朝日なのですけれども、尾西市の中心から外れているのですよ。今まで尾西市に対してお願いをする。30年かかってやっとできたところが、25メートルの溝を埋めてもらいました。30年かかりました。

そうすると、今の話、合併するとますます離れていっちゃう。一宮の市長さんは、このようなことは何回もどこのシンポジウムでも聞いていると思いますけども、我々の願いは、要するに、市長さんあたりは4年に一遍ずつ、もし変わられるとしたら、また忘れられてしまうわけです。そういうことに対しての、市長さんたちは、我々が合併の問題を見ると、銭がたくさん入るから、今の時期にやると得だからという、合併の方にちょっと私も耳を傾けているのですが、我々は地域に住んでいるから、そこがよくなってほしいと思うのが、また中心の人が変わると、議員さんの圧力もあるのか知りませんが、置いていかれてしまうわけです。

そういうところの伝達事項は、あそこは何年前に受けたから直さなければならぬとか、そういうことを、伝達事項もつくっていないと思いますが、そういうことについてはどう思われますか。

以上でございますが。

#### ○谷 一夫合併協議会会長

どうもありがとうございました。

尾西市の中で朝日地区というところの方が、今回の合併について少し慎重な態度をとっておられるということは、前々から聞いておりました。今初めて直接お聞きしたわけでありまして、ああ、そういう事情だったのかと了解いたしました。

これは、木曽川町長さんの言葉を借りると、周辺とおっしゃったですか、だからということではなくて、やっぱり予算の関係で優先順位のことだと思います。ですから、お金が十分ある時代であれば、本当に皆一斉にやれるわけですが、今はなかなかそういうわけではございませんので、やはりそれぞれの地域の事情を十分に勘案して、優先順位をつけてやっていかざるを得ない、そういう部分があるわけでございますので、必ずしも皆様方のご要望に即お応えできるかどうかということとはなかなか難しいと思いますが、特に周辺だから遅れるということは決してございませんので。

これまでの尾西市のことを悪く言うことは私はようしませんけども、尾西市と新しい何か市ではまたこれは方針が違ってくるわけでありますから、そういうことも含めてこれからよく研究させていただいて、皆様方のご不満が少しでも少なくなるように、これは努力をしたいと思っておりますから、細かい事情はわかりませんので、今具体的にお答えできませんけれども、きちんと目配りをしてやらせていただきたいと思っております。

#### ○司会

どうもありがとうございました。

ほかにご質問ございます方。

では、女性の方お願いいたします。

#### ○質疑者C

一宮市のスズキです。

3人の首長さんにそれぞれお聞きしたいのですけれども、市の名前を公募されて、298種類の市の名前を委員会で5つに絞って、またそれを今度決めるということですけど、もうちょっと住民参加というか、市の名前決めるというのはすごくデリケートな話だと思って、大変複雑な内容で、委員会だけで決められて、本当にそれで市民の納得ができるかどうか、私、ちょっと不安を感じているのですけれども、3人の首長さんたちは市の名前を決めるに当たって、委員会だけで決めてしまっているものかどうかをどう考えているか、また、新しく生まれ変わるからということで、もし投票とかにしたら、多分、一宮市民が多いから一宮市になるのかなと思われるのですけれども、そういうことについてどういうふうに考えているか、ちょっとお聞きしたいんです。

#### ○谷 一夫合併協議会会長

今のご質問の中でもう答えは既に出ているかと思うのですが、住民参加といいますか、もっとみんなの意見を聞いてということになれば、おっしゃるとおり一番数の多いところへ決まる。もうやるまでもないですよ。28万対6万対3万でありますから、これはまずだれが考えたって、常識的に一番多いところに決まるだろうということは容易に想像がつくわけでありまして、そういうことはやはりよくないんだと。結果としてそうなるかもしれないけれども、手順としてはそういうことではなくて、できるだけ多くの方から、ひょっとしたら今の名前よりももっといい名前があるかもしれない、夢のある名前があるかもしれない、だから、皆さんの知恵を出していただいて、その中から数が多いとか少ないとかということに関係なしに、いい名前かどうかということに基づいて決めていきたいと思いますというのが我々の約束事なのです。

そんな中で5つの案が残りました。この中には一番数が多かった名前もありますし、4票ぐらいの名前も2つほど入っておりますし、2票だけというのもありましたね。ですから、非常に数が少なくても、これはいい名前だから候補として残しましょうというような形で5つ残しまして、あとはさっきの繰り返しになるのですが、例えば5つの中でまた皆さんから投票していただいたら、結局数の多いところになるわけですよ。これはもう結果はわかっていますよね。

ですから、スズキさんのおっしゃることは極めて矛盾があるわけで、公募をしたということに私は意味があるのではないかと考えています。

#### ○丹羽 厚詞合併協議会副会長

これはそれぞれ答えてもほとんど同じお答えになってしまうかと思うのですけれども、今回この公募をするということで決めた理由の一つとして、私自身は黙っていたら、先ほど言われたように、多数決議論をとったら、これは合併の方式がどうであれ、一宮市になるということが予想されてしまうわけなのですね。ですけど、そんなことで、最初にその名前がありきではいけない。やはり新しい市になるのだから、新しい気持ちでまず市の名

前を決めるところからスタートをしたいという思いがありましたし、もう一つは、一宮市という名前を超える名前があれば、これは是非みんなで考えていきたいという話を、尾西の市民の皆さんに住民説明会でもさせていただきました。

もう一つは、先ほどシンポジウムの中でもお話ししましたがけれども、一宮市民にも、一宮市ありきではないよということを訴えるためにも、この公募方式が必要ではないかということで、公募をさせていただきました。

こうやって公募をしたことが住民参加であると思っております。協議会で決めていくということに関しては、何ら別に問題のないことだと思いますので、ご理解いただきたいと思えます。

#### ○山口 昭雄合併協議会副会長

名前は本当に大事だと思います。これ一つで合併がご破算になったところもあります。また、後から反省しているところもあります。

私の身近なところでは、岐阜県の萩原町というところと姉妹提携を結んでいますけど、ここが5つのまちが合併しようということになりましたけど、最終的な詰め、下呂という有名なまちがありまして、名前も下呂、市役所の位置も下呂ということに決まりかけたというので、萩原町の皆さんは下呂下呂方式は嫌だというようなことを言われて、一時ちょっとご破算になりかけたことがあるのですね。そのぐらい大変なことです。名前はこうなるよということを、皆さん方は協議会で決められたことをもとにして住民投票をされる。名前がこうなる合併がいいのか悪いのか、そういう判断ができる機会があるから、私は大変結構だと思います。

また、名前だけでこんな大事なことを決めるべきではないというお考えも、ちゃんとその住民投票の中に表れてくると私は信じています。

そんなところです。

#### ○司会

ありがとうございました。

ほかにご質問ございます方。

それでは、お願いいたします。

#### ○質疑者D

丹羽市長さんにお尋ねいたします。

丹羽さんが立候補されたときに、私のうちへお見えになった。これは個人的なことで、こんなところで言うべきことではございませんけれども、そのときに私が言った言葉は、「その40歳そこそこの若さで、海部陣営にがっちり固められた大島市政に対し、立候補したその勇気に私は惚れた」と言って、1週間、一所懸命、丹羽市長さんを応援いたしました。

しかし、当選されたそのあくる日の新聞を見ますと、「大島市政は強引過ぎる」と、こうおっしゃったと新聞に出ております。今現在、この合併問題、これも強引過ぎやせないかと。先ほど「余りにも時間が少ないから、ちょっと強引に決めるかもしれませんが、

誠に申し訳ない」とおっしゃられましたけれども、もう少しこういうシンポジウムとかあるいは説明会とか、頻繁に開いて、市民の皆様が真にこの2市1町がどうしても合併しなければやっていけないという点を、しっかりと説明していただきたい。

それともう一つ、今まで全然四日市の稲沢先生もこちらの2市1町の先生方も、人員についてのお言葉が一つもございません。というのは、合併すれば、市会議員、これ当然減ってくると思います。それと、今後ろの方で明地の方が、「丹羽さんは私は非常に好きだ」と言われた。私もそのとおりなのです。丹羽さんが好きであり、4年、8年とこの尾西市長をやっていたがために、1週間、一所懸命、丹羽さんを応援させていただきました。これが合併となると、当然あなたの地位というものはなくなってしまう。今、谷さんが偶然にもおっしゃられましたが、「合併すれば私が初代一宮市長になる」と言われました。

丹羽市長さんにお尋ねしますが、おたくの大じいさん、この方が何市をつくられたかご存知ですか。私が言うまでもなく、大じいさんの時代にこの尾西市が誕生いたしました。それがひ孫の代になって、尾西市という名前が消えてしまう。こんな悲しいことはございません。

それともう一つ、市会議員の数がどうなっていくのか。これが皆さん方から一言も出ておりませんので、もしここで発表できるのであれば、おっしゃっていただきたい。

以上でございます

#### ○丹羽 厚詞合併協議会副会長

いろいろとお言葉をありがとうございます。

一つは、強引ではないかというお話であります。

ですからこそ、私は住民投票というのを一番に打ち出して、これを通り過ぎなければ合併を進めることができない。もしこの住民投票がないままこの短期間でやるとしたら、それこそ強引な手法になってしまうのではないか。これは尾西市独自の状況ではありますけれども、そういった立場で住民投票を2月に行わせていただきます。

それも、最初に住民投票をやって、やるかやらないかを決めた上でいろいろな取り決めるをする一般的な合併での住民投票のやり方ではなくて、しっかりと皆様方がどうなるかわかってから、住民投票をやるという形であれば、皆様方の判断がしやすいのではないかと、進めさせていただいていることで、強引ということは、できればそうではないと思っただけでございます。

ただ、これは個人的な思いでありますので、そうではないと私が言っても、そうだと思うれば、それは仕方ないことかもしれませんけれども、限られた時間の中でやらざるを得ないというのは、これは本当に何度もシンポジウムの中でもお話したように、今回の合併は、やるのであれば期限内に。期限内にやらないのだったら、当分の間は尾西市だけで頑張っただけでやっていく。その2つに1つを選ばなければいけない合併だと思っておりますので、その期限内にやるのであれば、期限内にやる、そういったタイムスケジュールで話が進んでいくということは、ご理解をいただきたいと思っております。

また、曾祖父のお話をさせていただきましたが、曾祖父も起町というそれを脱して、エリアのために尾西市になるべきということを考えて、そうなったのではないかと考えております。自分もこのエリアのために、尾西市というその枠は外すべきではないかと、これは個人的な意見であって、決定するのは住民投票ということは何度もお話ししているわけですが、私個人の意見としてはそういった形で合併協議を進めていくべきではないかという、思いで今取り組ませていただいているわけであります。

ただ、私自身の今後のことというのは、そんなことを考え出したら、進められる話も進められなくなってしまいますし、そういったことは一切自分は今考えずにやっておりますので、これもご理解いただきたいと思っております。

市会議員の数につきましては、今協議中で、結論は出ておりませんが、ある程度だんだんと内容が固まりつつあります。今の協議されている段階で、主流のこうなるだろうと思われる形は、一宮市の今の市会議員の任期、これが19年4月、次の統一地方選挙になるわけでありますが、ここまでは今回選ばれた22人の尾西市の市会議員、そして、現在の20人の木曾川町の町会議員、合わせて78人の新しい新市の市会議員としてこの19年4月までは務めていただく、ご活躍いただく。

そして、その後に定数46、これはまだ協議段階なのでありますが、定数46で選挙を行って、新しい市会議員をそのときに決めていただく。そうすると、多分人口割で、ざくっとした話をしますと、尾西市の人口からいくと、7人から8人ぐらいであろうということは、予想されるわけですが、そういった形で市議会の流れというのは、今協議会の中でありますが、話し合われております。

以上です。

#### ○司会

どうもありがとうございました。

予定の時間が少し過ぎておりますが、せっかくの機会ですので、もしご質問がございましたら、あと1名ほど受け付けさせていただきたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

それでは、お願いいたします。

#### ○質疑者E

私、起に住んでおりますシラキでございますけれども、先ほど木曾川町、それから一宮市、両方とも15分もあれば車で行けるようなところで、非常に今、垣根の話が出てまいりましたけれども、垣根があってはおかしいと私は思っております。

非常に合併ということについては、今は時の流れでもありますから、その時代に乗って、優遇制度を受けられるものは受けた方が、やはり尾西市にとっても、木曾川町にとっても、一宮市にとってもベターではないかと、こう思っております。

時間もございませんから、簡単に申し上げますけれども、変えなくてもいいものは変えなくていい。変えるものは必要に応じて変えていくという考え方が必要ではなかろうかと、こう思います。

非常に今日3人の市長、町長さんのお話聞きまして、非常に熱心に我々のことを考えて

いただいていると思いました。

それから、もう一つは、稲沢先生から、50年先、この地域はどうなっておるだろうかという暗い話も聞きました。元気なまちづくりをひとつお願いして、私の意見とさせていたきたい、こう思います。

ありがとうございました。

#### ○司会

ありがとうございました。

それでは、これで質疑応答を終わらせていただきます。ありがとうございました。

これをもちまして、一宮市・尾西市・木曾川町合併シンポジウムを終了させていただきます。

皆様方には最初に受付でお渡しいたしましたアンケート用紙、大変お手数でございますが、ご記入をいただきまして、回収箱にお出しいたしたいと思えます。ご協力お願いいたします。

本日は長時間にわたりまことにありがとうございました。（拍手）

どうぞ皆様、お忘れ物などございませんよう、そして、交通事故などにお気をつけてお帰りくださいませ。ありがとうございました。

午後4時10分 閉演